

東北学院礼拝説教集 第6号

LIFE



イエスは言われた。
「私は道であり、真理であり、命である。」
(ヨハネによる福音書 14章6節)

表紙イラスト・挿絵 ひぐちけえこ

LIFE



東北学院礼拝説教集 第6号

2026年2月

東北学院宗教センター発行

目次

第六号発刊にあたって

原田 浩司
……

6

副題「LIFE」について

阿部 頌栄
……

7

主は我が光 我が救い

詩編 二七編一節

西間木 順
……

8

新しい生き方を目指す

ローマの信徒への手紙 七章六節

吉田 新
……

12

大学礼拝の意味

マタイによる福音書 一〇章二九〜三一節

川島 堅二
……

18

主イエスが見えるか

マルコによる福音書 八章二二〜三〇節

瀬谷 寛
……

22



ありのまま受け容れられたいという願いに、誰が応え得るか

イザヤ書 四九章一四〜一六節前半

渡邊 蘭子
……

28

闇バイト

ヨハネの手紙一 四章九節

松村 尚彦
……

34

人生とは何か

ルカによる福音書 六章二〇〜二六節

佐藤 由子
……

38

岩の上に建てられた家

マタイによる福音書 七章二四〜二七節

藤野 雄大
……

42

人生を変える秘訣

フィリピの信徒への手紙 二章一三〜一四節

大澤 史伸
……

46

ウィリアム・ホーイ先生の警告

ルカによる福音書 二二章五〜六節

大西 晴樹
……

52

利他主義による平和

ルカによる福音書 一〇章二五〜三七節

大門 耕平
……

60



いつか終わるもの

マタイによる福音書 二六章三六〜四四節

成 智圭
……………

愚かさも賢さもなく

マタイによる福音書 二六章六〜一三節

阿部 頌栄
……………

礼拝の沈黙

マタイによる福音書 二六章五七〜六八節

松井 浩樹
……………

初心に帰れ

ヨハネの黙示録 二章一〜七節

岡田 勇督
……………

言葉の本質

ヨハネによる福音書 一章一節

中本 純
……………

掟を破られたイエス

ヨハネによる福音書 九章一三〜二三節

渡邊 有美
……………

「嬉しいな」「アーメン」「ありがとう」

テサロニケの信徒への手紙一 五章一六〜一八節

島内久美子
……………



生ける石として、社会に生きる

ペトロの手紙一 二章一〜一〇節

椎名雄一郎
……

96

平和の種

ゼカリヤ書 八章一二節

田島 卓
……

102

いちばんはじめのクリスマス

ルカによる福音書 二章八〜二〇節

米山 結実
……

108

後期音楽礼拝

マタイによる福音書 二章一〜一一節、

マタイによる福音書 二五章一〜一三節

今井奈緒子
……

116

光は闇の中で輝いている

ヨハネによる福音書 一章一〜一八節

齋藤 渉
……

122

一本の木による救済の秘義

マタイによる福音書 二章九〜一八節

原田 浩司
……

128

あとがき

原田 浩司
……

134

第六号発刊にあたって

二〇二五年度に東北学院の各設置校の礼拝で語られた説教を、今年も一冊にまとめ、読者の皆様にお届けします。本年度は東北学院のスクールモットー「LIFE LIGHT LOVE」の「LIFE（ライフ）」をテーマに、各校それぞれの説教者に寄稿いただき、編集しました。寄稿者の関係上、大学での説教が多くを占めていることをご承知おきください。

東北学院で学ぶ学生らにとってはキャンパス「ライフ」こそが、日々の生活（LIFE）の充実度をはかる重要なバロメーターとなります。そのことは、これまでのコロナ禍を体験し、リモート授業を強いられた経験者なら誰もが実感できるのではないのでしょうか。生徒・学生たちにとって、日々の通学の中で自然を感じ、春夏秋冬の移ろいを体感しながら、ただ「受験」や「単位」といった近視眼的な目標に埋没した日々を過ごすのではなく、聖書の言葉をとおして、この世界を生きる人間に対して神が求めておられることに思いを馳せながら、礼拝堂に集う一人ひとりが今の自分の生き方（LIFE）やこれからの自分の人生（LIFE）などを長期的視野から見つめ直すのが、東北学院における礼拝の教育的な使命であると言えます。そのような日常生活（LIFE）の積み重ねの上に、一人ひとりそれぞれの「わたし」という人格が説教の言葉をとおして練磨されていくことを願っています。

年末恒例の「T&D保険グループ 新語・流行語大賞」の一つに「二季」がノミネートされました。東北地方も近年は猛暑が続き、四季が実感されにくくなっています。今年の説教集は、春から冬にかけて、一年の「ライフサイクル」に則して説教集を編纂しています。折々に語られた説教が、どうか学生たちの心に届き、一人ひとりの「いのち（LIFE）」の豊かさ、尊さ、すばらしさを深く知る貴重な手がかりとなりますように。寄稿していただいた各位がそれぞれの立場から、そのような願いを込めて、一年をとおして語られた説教です。卒業後も、これから続く日々の暮らし（LIFE）の中で、東北学院で学んだキリスト教教育が、豊かに実を結びますよう、心から祈念をいたします。この説教集をお読みいただく皆さんには、東北学院のキリスト教教育の神髄に触れていただければ幸いです。

（大学宗教部長・宗教センター主任 原田浩司）

副題「LIFE」について

東北学院はスクールモットーとして「LIFE LIGHT LOVE」を掲げています。今年度の説教集は、このモットーから「LIFE」を主題として準備を進めました。説教集を手にとってくださる皆さまに、福音に基づいた「LIFE」が豊かに与えられることを願っております。

わたしたちは、「LIFE」すなわち「いのち」についてどのように捉えているでしょうか。いのちとは何かを問うことは、わたしたちが「人間」や「生きる」ということをどのように捉えているかと関わります。生きているとは、心臓が動いている、身体が動く、考えることができる、などということでしょうか。その反対が死だとするならば、それは何を指すでしょう。肉体の活動、生体的な行動が終わることを指すのでしょうか。それが「いのち」が失われるということなのでしょうか。

キリスト教が捉える「いのち」とはそのように、ある意味で単純な、肉体の死との対称的な関係だけで捉えられるものではありません。たとえ肉体としての死を迎えようとも、その死によって遮られることなく、これを超えて輝き、生き生きと分かち合われ続けるもの。それがキリスト教において捉えられている「いのち」、生きるということなのではないでしょうか。

わたしたちは「いのち」を、どのように生き生きとしたものにすることができるでしょうか。聖書の御言葉を聞き、生きることを考えることは、まさにそのようなわたしたちの問いを育み、言葉を探すためのものです。二〇二五年度に東北学院の各校で分かち合われたメッセージを通して、そのことを皆さまと分かち合いたいと願っております。

(宗教センター主事 阿部頌栄)



主は我が光
我が救い

榴ヶ岡高等学校 宗教主任

西間木

順

詩編 二七編一節

ダビデの詩。

主はわたしの光、わたしの救い

わたしは誰を恐れよう。

主はわたしの命の岩

わたしは誰の前におののくことがあるう。

(新共同訳)

今日から全年次がこの礼拝堂に集い、共に礼拝を捧げます。東北学院の教育の基本方針では、学校は「学校行事」と定められています。礼拝では、聖書に書かれてある神の言葉を用いて、自分の心と対話していただきたい。そうすることによって、一人一人の心が成長していきます。また、過去から学び、未来に目を向け、今をどう生きるのかを考えていただきたいと思えます。

この礼拝では、年次という違い、コースという違い、クラスという違いを超えて、心を合わせ、思いを一つに、声をそろえて、讃美歌を歌い、また主の祈りをささげていきましょう。二年次、三年次の皆さんは、ぜひこの礼拝においても、一年次の模範となっていたいただきたいと思えます。

さて、今日、共に読みました聖書の箇所、詩編二七編一編「主はわたしの光、私の救い」は今年度の聖句です。二年次、三年次の皆さんは、この聖句を読んで、すぐに思い出したことがあるでしょう。

事務室や図書室がある一号館の西側に、定礎碑があります。そこに刻まれた聖書の言葉が、古い日本語ですが、「主はわが光、わが救いなり」なのです。

私たちが今年度から使用いたします、教室のある建物、礼拝堂がある建物は、もともと、東北学院大学が一九八八年から使用していた建物です。当時、文系学部学科の一年、二年と、その後設置された教養学部の学びの場として使用してきた建物です。

登校してきたときに真っ先に目に入るのが、礼拝堂があるこの建物です。礼拝堂の天井をご覧ください。これは旧約聖書に出てくる、旅しながらでも礼拝できる場所として使用していた「幕屋」をイメージしているのだそうです。そして、皆さんから見ても、左側の前から、四枚、右側の後ろから、四枚、そして正面にあるステンドグラスは、主イエスのご生涯を表しています。このステンドグラスを制作した田中忠雄さ

んは、「そのステンドグラスの内容をわかっていただくと、東北学院が計画した理由がわかると思っています」と述べています。

先日、一九八八年四月の「東北学院時報」を読みました。当時の院長が、次のように述べていることが書かれてありました。

「新キャンパスの定礎碑には、『主はわが光、わが救いなり』という聖書の一節が刻まれています。この地で教育するにあたり、私たちが最も願っていることは、この言葉をぜひ実現したいということです。ただ単に知識を蓄えるだけではなく、自分の一生の光、自分の一生の救いを得られるような教育を施したいと願っています。」

そのような東北学院の願いを、このキャンパスにおいて、礼拝堂の場所やステンドグラスなどでも表しているのではないかと思います。

建学の精神が言い表している「聖書の示す神に対する畏敬の念と、イエス・キリストに倣う隣人への愛の精神を培い、文化の発展と福祉に貢献する人材」になっていただきたい。神が一人一人に与えておられる使命に気づき、それをこの世の中で実践する人になっていただきたい。一つ一つの授業を通して、それを実践するために必要な知識をしっかりと身に着けていただきたいと思います。

《祈り》

父なる神

新しい命を与えてくださり、この学校へと招いてくださり感謝いたします。

あなたの招きにこたえ、生徒教職員が、この場に集い、ともに礼拝を捧げることが出来ます幸いです。感謝いたします。

どうぞ、私たちが、あなたのみ言葉を心に刻み、主イエスを模範とし、あなたの愛を用いて、この世の中で、隣人への愛を実践していくことが出来ますように。

また、あなたが私たち一人ひとりに与えてくださっている使命に気づき、その使命を果たしていくことが出来ますように。

どうぞ変えることのできるものと、変えることのできないものとを識別する知恵を私たちに与えてください。

すべてのことを当たり前だと思うのではなくて、どんなことにも感謝する心を与えてください。今、この場におりません友のために祈る心を与えてください。

この学校に連なる生徒教職員一人ひとりが、「今日もこの学校に来てよかった」と思える一日にもにしていくことが出来ますように。

この祈り 尊いわれらの主 イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン

(四月十日 榴ヶ岡高等学校)



新しい生き方を目指す

大学総合人文学科長 吉田 新

ローマの信徒への手紙 七章六節

しかし今は、私たちは、自分を縛っていた律法に対して死んだ者となり、律法から解放されました。その結果、古い文字によってではなく、新しい霊によって仕えるようになったのです。

(聖書協会共同訳)

新年度、新学期という言葉にある「新」という漢字は、聖書ではよく使われる漢字の一つです。聖書全体では六〇回ほど使われています。「新しい命」「新しい教え」といった「新しい」という形容詞もしばしば見られます。本日の聖書の箇所にも「新しい霊」という言葉があります。

さて、最初に皆さんに一つ質問いたしたいと思います。

大学が終わり、午後は仙台でご友人と買い物をする約束があるとします。仙台駅のステンドグラスの前であなたは待ち合わせをしています。少し早く到着したあなたは、待ち合わせの時間まで三〇分ぐらいあることに気付きました。どこかのカフェで時間を潰そうと考えます。二軒のカフェを見つけました。ふたつの店は特に大きな違いはありません。二つとも極めて平凡なよくある店です。一つの店は以前、住んでいた町で入ったことのあるチェーン系列のコーヒショップ。もうひとつのカフェはまったく知らないお店です。

さて、皆さんでしたら、どちらの店に入りますか。

- ① 以前、入ったことのあるカフェに入る
- ② 見知らぬカフェに入る

おそらく、多くの人は①だと思えます。これはある脳科学の本で知ったのですが、私たちの脳は一度、決断を下すと、その決断によって自分の将来の行動も縛るといいます。つまり、私たちの脳は、新しいことが嫌いなようです。先の質問を多くの人に聞いてみますと、やはり①の人が多いのです。

このような行動を専門的用語では「セルフハーディング」と呼んでいるそうです。「ハーディング」と

は「家畜の群れ」を意味する言葉です。自分自身を家畜にするように、私たちは自分を飼いならしてしまふのです。一度下した決断が、自分の次の行動を縛り、何の考えなしに習慣化してゆくことが、どうやら私たちの日常のようです。

入学された皆さんは、きっと入学当初から戸惑いの連続だと思えます。新しいことというのは、いつでも私たちが戸惑わせるものです。言い換えれば、私たちは新しいことを始めるのがどうしても億劫なのです。おそらく、慣れてきた生活を崩し、変更するのを避けようとはします。

しかし、私は皆さんに新しいことに挑戦してほしいと願っています。さきほどの質問でいえば、あえて「見知らぬカフェに入る」という行動を取ってみることも、時には必要ではないかと思えてなりません。

本日の聖書の箇所を記したパウロは、キリスト教の伝道者の一人です。パウロが記した『ローマの信徒への手紙』という手紙は、やがて自分が訪れることを望んでいるローマにあるキリスト教の共同体に向けて、パウロが自分の信仰や考えを紹介する、ある意味、長い自己紹介文のような手紙です。ここでパウロは自分の生き方を語ります。

パウロは律法を中心とした、かつてのユダヤ教の生き方から、イエス・キリストに出会って、新しい生き方へと変えられた人です。ですから、ここでは、自分のことを語っているのです。自分は「新しい生き方」をした者である、と説明するのです。文字に従うとは、これまでの古い生き方を指し、霊に従うとはキリストに出会った後の新しい生き方を意味していると思います。パウロがキリストに出会って、新しい

生き方を始めたのは何歳頃かといえば、三〇歳頃といわれています。パウロが生きた時代の平均寿命は二〇から二五歳です。当時、乳幼児の死亡率が低いので、平均寿命は今と比べて低いのですが、しかし、三〇歳というのは、当時の年齢感覚でいいますと壮年です。つまり、パウロはかなりの年齢になってから、今でいえば皆さんのお父さんぐらいの年齢で、これまでとはまったく違う新しい生き方をしたということになります。自分が五〇歳ぐらいになって、まったく新しい生き方ができるかと問われれば、素直に「はい、できます」といえないと思います。この意味でパウロは、これまでの自分の人生を全て捨てて、まったく新しい生き方を選んだ勇氣ある方に思えてなりません。

先ほど確認したように、私たちにはそもそもセルフハーディングと呼ばれているように、新しいことを挑戦しながらない性質があります。なぜ習慣的に自分の行動を縛ってしまうのか、いくつかの原因が考えられるでしょう。その大きな原因のひとつは恐れがあるからではないでしょう。もしかしたらこれは私たちの防衛本能に起因することかもしれません。

先の問いのように、カフェの選択だったらまだよいのですが、人生全般に当てはめてみると、どうでしょうか。わたしたちは、安全な、見知った、つまり楽な方ばかり流されていないでしょうか。日常生活が全然楽しくない、充実していないと感じている私たち。その原因のおそらくほとんどは、自分自身にあると思います。古い生き方にとらわれて、新しい方に向かない。新しさを求めているのに、本当は新しいことに恐れてはいないでしょうか。

セルフハーディングを捨てる。そして、まったく新しい生き方をしてみる。キリストに出会って、これまでの人生のすべてを捨てて、新しい生き方を自ら選んだパウロの言葉から私たちは学ぶべきことがあるように思います。パウロは別の箇所でこのように言っています。「大切なのは、あなたが新らしく造り替えられることです。」新しい年度の最初、このことを皆さんと共に分かち合いたいと思います。

(四月十四日 大学)

いつも喜んでいなさい。

絶えず祈りなさい。

どんなことにも感謝しなさい。

これこそ、キリスト・イエスにおいて

神があなたがたに望んでおられることです。

(テサロニケの信徒への手紙一 5章16-18節)





大学礼拝の意味

大学宗主任 川島 堅 二

マタイによる福音書 一〇章二九〜三二節

²⁹二羽の雀は二アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許し
がなければ、地に落ちることはない。³⁰あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。³¹だから、恐れることはない。あなたがたは、たくさんの雀よりも優れた者である。

(聖書協会共同訳)

今日は大学礼拝の意味を考えます。

東北学院大学は礼拝を大切にしています。キリスト教主義の大学は北海道から沖縄まで全国にたくさんあり、そのほとんどの大学で礼拝が学内行事として行われていますが、本学くらい礼拝を大切にしている学校は他にないと私は思っています。

一般入試で学院大を受験した人は、入試に臨むにあたって様々な受験上の注意の一部として、合格したら礼拝に出席することになるという説明を受けたと思います。受験生にこのような説明をする大学は他には聞いたことがありません。また礼拝に來た学生の学生証をカードリーダーで読み込んで出席を数えていることにもこの礼拝重視の姿勢が表れています。授業の出席をとるのにカードリーダーを導入している大学はたくさんあっても、礼拝でそれをしている大学はほとんどないのではと思います。

これほどに礼拝を重要視する理由、それは東北学院がキリスト教の福音主義、とりわけ改革派にルーツを持つことによります。聖書と礼拝の重視が改革派のキリスト教の伝統であるからです。

礼拝出席は卒業要件ではありません。かりに一度も礼拝に出席していなくても大学を卒業することはできます。では、なぜ出席をとるのでしょうか。それは卒業要件ではなくても、東北学院大学の教育の一環として礼拝を大切にしているというメッセージなのです。

みなさんも大切なことは必ずカウントするでしょう。親しい人の誕生日は覚えていると思います。誕生日を暗記している人は何人いますか？その数があなたにとっての大切な人の数です。

大学ではどれくらい単位をとったか、卒業要件である一二四単位まであといくつか、しっかりと数えてください。私は今でも時々単位が足りなくて卒業できないかともという夢を見ることがあります。これから

アルバイトを始める人も多いでしょう。自分の出勤日数、これはきちんと数えるのではないのでしょうか。もらったお給料の金額、これもちゃんとあるか数えます。

さて今日読んだ聖書の箇所には「神様はあなたがたの髪の毛までも一本残らず数えておられる」という言葉があります。もちろんこれは比喩です。それほど深く神様は私たちを愛しておられるという意味です。そういう意味で大学では礼拝の出席回数が数えられていると考えると考えてください。礼拝を大切にしているという事です。

年度末に、学生が何回礼拝に出席していたかが集計されます。そして出席回数が多い学生を学長が昼食会に招待してくださいます。多い学生は六〇〇回以上、在学中に礼拝に参加したという場合もあります。毎週礼拝に出席していなければ達成できない数です。そして一人一人が四年間の学生生活を振り返って感想を述べるのですが、礼拝にきちんと出席することで生活のリズムができてよかったと述べる学生が毎年います。

礼拝にほとんど参加しなくても充実した学生生活を送り、優秀な成績で、就職先も決まって卒業できる学生はたくさんいるでしょう。しかし、その反対、すなわち礼拝に毎週のように出席したのに、学生生活はでたためで、成績も悪くて、どこにも就職できなかったという学生はいない。礼拝は卒業要件ではない。プラスアルファだからこそ、それを大切にできる学生は余裕のある落ち着いた生活を送ることができる。これこそが大学礼拝の意味であると私は思っています。

どうぞ礼拝を大切にして、充実したキャンパスライフを送ってください。

(四月十六日 大学)

私があなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。

これが私の戒めである。

友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。

(ヨハネによる福音書 15章12-13節)





主イエスが見えるか

日本基督教団 仙台東一番丁教会牧師 瀬谷 寛

マルコによる福音書 八章二二〜三〇節

22 一行はベトサイダに着いた。人々が一人の盲人をイエスのところに連れて来て、触れていただきたいと願った。23 イエスは盲人の手を取って、村の外に連れ出し、その両目に唾をつけ、両手をその人の上に置いて、「何か見えるか」とお尋ねになった。24 すると、盲人は見えるようになって、言った。「人が見えます。木のようですが、歩いているのが分かります。」25 そこで、イエスがもう一度両手をその目に当てられると、見つめているうちに、すっかり治り、何でもはっきり見えるようになった。26 イエスは、「村に入っただけはいけない」と言って、その人を家に帰された。

27 イエスは、弟子たちとフィリポ・カイサリアの村々へ出かけられた。その途中、弟子たちに、「人々は、私のことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。28 弟子たちは言った。「洗礼者ヨハネだと言っています。ほかに、エリヤだと言う人、ほかに、預言者の一人だと言う人もいます。」29 そこでイエスがお尋ねになった。「それでは、あなたがたは私を何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「あなたは、

メシアです。」³⁰ イエスは、ご自分のことを誰にも話さないようにと弟子たちを戒められた。

(聖書協会共同訳)

今日与えられた箇所は、主イエスが、一人の盲人を癒やされた物語です。主イエスは盲人の手を取り、村の外に連れ出し、その目に唾を付け、両手をその人の上において、「何か見えるか」とお尋ねになりました。そして、ご自分の手をその人の目に触れて、見えるようにされました。主イエスがなさっていたやしの奇跡の物語です。聖書に触れてまだ間もない人は、こういう訳のわからない記事があるから、聖書は嫌いなんだ、受け入れられないんだ、という人がいるかも知れません。けれども大事なことは、このような不思議な物語、現実にはありえないように思える話から何を聞き取るか、ということだと思います。訳わかんないから聞かない、見ない、というのではなく、何か聞こえてくることはないだろうか、なにか見えることはないだろうか、と耳を傾け、耳を澄ましてみることに、目を凝らしてみることが、大事なことではないかと思えます。

先ほどは、この奇跡物語に続く、八・二七以下、「ペトロ、イエスがメシアであると告白する」という小見出しのついた箇所を、合わせて読みました。ここで初めて人間が、「あなたはメシアです」と主イエスの前で告白したのです。メシア、これはキリスト(救い主)、という意味です。主イエスの前で、主イエスコソキリスト(救い主)、と人間が最初に告白をした、その出来事が記されています。その信仰の告白に続いて、今度は、主イエスがこれから受けることになる、十字架の苦しみと死と復活について、弟子

たちの前ではっきりと教え始められました。ペトロの信仰告白に引き続いて、ペトロを、弟子たちを、そしてわたしたちをどのような形でお救いになれるか、ご自身の命を犠牲にして、それを差し出してくださいるほどに、わたしたちのことを思い、考えてくださる方が、はっきり、明確な言葉で語りだしたのです。

人々が一人の盲人を主イエスのところに連れてきました。みんなに愛されていた人に違いありません。「目が見えなくて、辛いだろう、苦しいだろうけれど、イエスさまというお方がいる、その方のもと一緒にいこう」。盲人は一人では歩けません。その者の手を取って、主イエスのもとに連れて行きます。この記事は、たとえばこの盲人が、助けてくれ、と叫んだ、とか、あるいはどんな信仰をもっていたのか、については何も記されてはいません。ただ、主イエスがどのようにこの盲人に触れたのか、それについては実に丁寧に記されています。

主イエスご自身がまず、盲人の手を取りました。村の外に連れ出します。二人きりになります。そして目に唾を付け、両手をその人の上に置くのです。「何か見えるか」。すると盲人が見えるようになりました。「人が見えます。木のようですが歩いているのがわかります」。けれどもまだ人であるのか、木であるのかはつきりわかりません。そこで主イエスはもう一度両手をその目に当てられます。するとよく見えてきていやされ、何でもはっきり見えるようになりました。一度だけではありません。二度触れました。あるいは、二度だけでなく、何度も何度も触れたのかもしれない。

メガネを掛けている人は、視力を測るでしょう。最近、わたしも小さな文字が見えにくくなったので、メガネを掛けるようになりました。視力検査をする時、今は双眼鏡のようなものを覗き込みながらすることが多いように思います。あれが見えますか、これが見えますか、なにか見えますか？そう言いながら、

担当の方がレンズを取り替えてくれます。「何か見えるか？」同じように主イエスが聞いてこられます。この目の見えなかった人の目の前に現れた最初の姿は、主イエスでした。「歩いているのがわかる」。もしかしたら、主イエスが歩いていてのをお見せになったのかもしれない。初めて見る人、初めて見る木。どちらも、地面から真つすぐ立っている、というのとはわかって、どちらが人でどちらが木か、判別できなかったかもしれない。目が開けられて、うすぼんやり見えてきます。眼の前に人がぬっと立っています。その人は首を傾げたかもしれません。けれどもそこで主イエスは歩いてみます。「ほら、歩いているのが見えるか。わたしがあなたの前に立っているのが見えるか」。そして、何度も何度もこの人に触れながら、何でもはつきり見えるようにさせてくださいます。わたしは、このとき、この盲人の前で主イエスは、どんな顔、姿をして、歩いてみせたりしたのかと想像すると、実に楽しい思いがいたします。

この目の見えなかった人の目が見えるようになった時、主イエスの手は、どのように見えたのでしょうか。「ああ、この手でわたしの目を触れてくださったんだ」。その時に主イエスの手や足は、どんな手足だったのでしょうか。

この物語は、肉眼では主イエスをはつきり見ているのに、本当の主イエスのお姿が見えていない、ということが起こりうることを、示していると思います。だからこれは単なる癒やしの奇跡物語、にとどまりません。見えない、とはどういうことでしょうか。主イエスのことが見えない、というのは、主イエスがやがて、自分の弱さ、未熟さ、不安を抱くこと、それら一切を含めた罪から解放してくださるために苦しみ、十字架につかれるお方であることが見えない、そしてそのために甦ってくださったその姿が見えない、ということなのです。だから、ベトサイダで盲人をいやす、という物語を何度も何度も聴きながら、あるいは


思い出しながら、このマルコによる福音書を最初に読んでいた人たちは、改めて何度も決心し直したに違いないと思います。「ああ、あの時自分たちは、ちっとも主イエスのお姿が見えていなかった、けれども、もうその目を濁らせないようにしよう、主イエスを見失わないようにしよう」。

みなさんも、主イエスのお姿が見えなくならないように、しっかりと、主イエスのお姿を見ることができるように、主イエスを見せていただくことができるように、この礼拝で、大切に聖書の言葉を聴き続けていただきたい、と思います。

《祈り》

主イエスの大きな手、大きな足をきちんと見ることが出来ますように。その手足によって、わたしたちをいやし、救ってくださることを、心から感謝することが出来ますように。主イエス・キリストの御名によって、祈ります。アーメン

(五月八日 大学)



神は独り子を
世にお遣わしになりました。
その方によって、
私たちが生きようになるためです。

ここに、神の愛が
私たちの内に現されました。

(ヨハネの手紙一 4章9節)



ありのまま受け容れられたいという願いに、
誰が応え得るか

大学宗教授任 渡邊 蘭子

イザヤ書 四九章一四〜一六節前半

¹⁴しかし、シオンは言った。

「主は私を見捨てられた。」

わが主は私を忘れられた」と。

¹⁵女が自分の乳飲み子を忘れるだろうか。

自分の胎内の子を憐れまずにいられようか。

たとえ、女たちが忘れても

私はあなたを忘れない。

¹⁶見よ、私はあなたを手のひらに刻みつけた。

(聖書協会共同訳)

人間が誰しも持っている願望とは何でしょうか。それは、自分のことを愛して、受け容れてほしいという願望でしょう。私たちは誰もが、「ありのままの自分を受け容れてもらいたい」、「否定されずに、愛されたい」と、心のどこかで願って生きています。一見すごく強くみえる人であっても、心のどこかにはこの願望があるでしょう。この願望を持つことは人間として自然なことです。ブレーメンという神学者はこのような語っています。「すべての人は受け容れられること、しかもあるがままに受け容れられることを望んでいる。私が受け容れられないとき、私のなかの何かが破壊される」と。

このように、誰もが「ありのままの自分を受け容れてほしい」という願望を持っていると言えるわけですが、この願望が、人との関係の中で十分に叶うかといえば、そんなに簡単ではないでしょう。例えば、親しい友人や恋人であっても、自分の欠点や弱さを含めて、すべてをありのまま理解し、受け容れてくれるかといえば、そういうわけではありません。一時的には可能でしょうし、部分的に欠点を受け容れてくれることはあるでしょうが、やはり限界があります。さらには親であっても、自分のことをすべて理解し、受け容れてくれるとは限りません。「なんで親なのに自分のことをわかってくれないんだろう」と思って寂しく感じた経験がある人もけっこういると思います。

人が人を理解し受け容れる範囲にはどうしても限界があります。いくら理解力があって、すごく優しく、寛大な人であっても、限界はあります。もし、自分の欠点や弱さも含めて、すべてをありのままに理解して、すべてを受け容れてほしいと相手に要求しつづけるとすれば、そのことによって相手には大きな負担をかけることになるでしょう。それはいわゆる「依存」であって、いずれは関係性が崩壊することになってしまいます。

しかし、神の愛には限界がありません。聖書によれば、神はわたしたち一人一人を欠点や弱さも含めて、すべてを、ありのままに、徹底的に受け容れ、愛しているといえます。今日の聖書箇所は、そのことがよく示されている箇所です。一四節で、「シオンは言った」とありますが、この「シオン」とはイスラエル民族のことです。イスラエル民族は当時、バビロンという大国に支配され、捕虜として捕えられていました。イスラエル民族は自分たちの国を失い、自分たちの存在価値がわからなくなっていました。彼らは「もう自分たちは見捨てられた。神様は自分たちのことなんか忘れてしまった」と感じていたのです。

そのようなイスラエル民族の叫びに対して、神様は一五節でこう答えます。「女が自分の乳飲み子を忘れるだろうか。自分の胎内の子を憐れまずにいられようか。たとえ、女たちが忘れても私はあなたを忘れない。」この言葉から、神様の人間に対する愛がわかります。赤ちゃんに対する母親の愛は、人間のなかで最も深い愛の一つでしょう。赤ちゃんは何もできない存在です。ただ泣いて助けを求めるしかありません。母親はその泣き声に気づき、世話をし、守ります。それは見返りを求めない愛です。しかし、神様は、その母親の愛よりも強く深い愛で人間を愛している、と語っています。「もし母親があなたを忘れることがあったとしても、私だけは絶対にあなたを忘れない」と語っています。これはすごく力強い言葉です。たとえ誰かが見捨てたとしても、神様が見捨てることは絶対にはありません。変わることなく、深く思い続けてくれています。その愛には限界がありません。人間の愛には限界があったとしても、神様の愛には限界がないのです。

そして一六節の前半には、「見よ、私はあなたを手のひらに刻みつけた」とあります。「刻みつけた」という言葉には、強い意味が込められています。何かを忘れないようにするために、手のひらに、例えばマ

ジックでメモを書くことがあるかもしれません。しかし、ここで神様は自分の手のひらにあなたのことを「刻みつけた」と言っています。「刻みつける」というのは、絶対消えないようにするために傷をつけるということです。そうなると、それは一時的なものではなく、消えないものとしてずっと残り続けます。つまり、神様は私たち一人一人を一時的に覚えていてではなく、決して忘れることなく、ずっと記憶しているということです。

聖書によれば、神様は私たち一人一人を個として認識しています。私たちのことを「人間」とか「人類」といったように全体的にぼんやりと認識しているのではなく、一人一人を名前ごとに個として認識し、それぞれの性格、それぞれが人生で直面すること、そのすべてを知っています。そして、私たちにどんなに欠点や弱さがあったとしても、そのすべてを受け容れて愛しています。手のひらに一人一人の名前を刻み、一人一人の悩みや苦しみを決して忘れることなく、見捨てることなく、愛しているのです。

先ほど紹介したブレイメンという神学者は神の愛についてこのように語っています。「いつかある日、私はだれかにめぐり会う。その人に私は本当に話すことができ、彼は私の語る言葉を理解してくれる。彼は聞き、私が言い残したことまでも聞くことができる。こうして彼は、私を受け容れてくれる。神こそは、この夢の実現である。彼は、私の理想・失望・犠牲・喜び・成功・失敗とともに、私を愛して下さる。神こそは、私の存在の最も深い基盤である」と。今日の話のはじめに、私たち人間は誰しも自分のことをありのままに受け容れてほしいという願望をもっているという話をしました。ブレイメンはこの願望が、神にありのまま受け容れられることによって、完全に、徹底的に叶うと言っているのです。

このことを聞いたからといって、じゃあすぐに「神様の愛を信じて生きていこう」とは思えないかもし

れません。でも、生きていく中で、みなさんが何か孤独を感じて苦しいときや自信がなくなって落ち込むとき、今日お話ししたように、みなさんのことを個として認識し、弱さや欠点、失望や悩みもすべて理解して、愛し、包み込んでいる存在がいる、ということをしりでも思い出してくれたらと思います。

《祈り》

神様、今日はイザヤ書の言葉から、あなたがどれほど私たち一人一人を愛してくれているかを学びました。あなたが、私たちの欠点や弱さも含めてすべてを知り、ありのままを受け容れ、愛してくれていることを心に留めて生きていきたいと思えます。この祈りをイエス・キリストの御名によってお捧げします。アーメン

(五月二十七日 大学)

参考文献

ペーテル・ファン・ブレーメン 「受容を受け入れる勇氣」、上智大学神学部神学ダイジェスト研究会『神学ダイジェスト』、第四四卷、一九七八年、三六―四〇頁。



私を強めてくださる方のお陰で、

私にはすべてが可能です。

(フィリピの信徒への手紙 4章13節)



闇バイト

経営学部教授 松村尚彦

ヨハネの手紙一 四章九節

9 神は独り子^{かみひとご}を世^よにお遣^{つか}わしになりました。その方^{かた}によって、私^{わたし}たちが生きるようになるためです。ここに、神^{かみ}の愛^{あい}が私^{わたし}たちの内^{うち}に現^{あらわ}されました。

(聖書協会共同訳)

最近テレビや新聞で報道されるニュースには、心を痛める暗いニュースが多くなってきたように思います。たとえば少し前には「闇バイト」という言葉をよく耳にすることがあります。私はこのニュースを聞くたびに、「闇バイト」に応募する人は、どんな人で、なぜそうしたことをしてしまったのだろうか、とても気になっていました。

そのような時に、「闇バイト」をしていたという少年を引き取り、一緒に生活しているという方から話を聞く機会がありましたので、今日はその話をしたいと思います。

この話をしてくださったのは、昨年図書館で行った「著者と語ろう」というイベントに講師として来られた佐々木炎さんという牧師です。佐々木さんは、ご自身が本当に苦難に満ちた人生を歩んでこられた方でした。子供の頃は、両親から虐待を受け、中学と高校は、児童保護施設で育てられたのですが、結局高校生活は長続きせず、卒業もできなかったそうです。

そのころ彼は、社会と大人たちから「自分は価値のない存在だ」と思われていると感じ、自暴自棄になって、かなり悪いことに手を染めたこともあったということでした。

その彼が二一才の時にキリスト教と出会い、少しずつ変えられていくことになります。そして三三歳の時に意を決して牧師となり、かつての自分と同じように、社会から疎外され、苦しんでいる人たちを受け入れながら、一緒に生きる生活を始めるようになります。

講演の中で、佐々木さんは、彼が受入れた様々な人のことを紹介してくださったのですが、最近もこんな子を受け入れたと言って話されたのが、最初に言いました「闇バイト」の少年です。

この少年は、いわゆる詐欺の電話をする「かけ子」をして捕まり、昨年の六月に刑務所から出てきた人

でした。でもこの少年は、刑務所から出てもどこにも帰るところがありません。まだ若いのに、家族とのつながりもなく、誰も頼る人がいない、とても孤独な人でした。そんな少年を佐々木さんは、同じような境遇の人たちが暮らす、自分の教会兼福祉施設に引き取ったのです。

すると、しばらくして不思議なことが起こりました。この施設には、毎日夜になると何処へいくともなく、徘徊をしていた認知症のお婆さんがいたそうです。毎晩どこに行くか分からないので、職員の方々がいつも心配していたのですが、このお婆さんが、ある日を境に徘徊をやめたそうです。そして「元かけ子」の少年の部屋に行っては、夜通し取り止めのないことを話し続けるようになったというのです。

しかし、これでは少年が夜眠れないだろうと、佐々木さんは心配して、彼を別の部屋に移そうとしました。この時、普段は口数の少ない少年が、意外なことを話し出したそうです。

「いいえ、僕はこの部屋が良いんです。毎晩お婆さんの話を聞いてあげること、自分が、生まれて初めて、人の役に立っていると感じる事ができたんです。だからこの部屋に居させてください」と。

これは、自分の部屋に閉じこもったまま、誰とも話そうとしなかった少年が、認知症のお婆さんよって、少しだけ人に心を開いた瞬間でした。

人は全くの孤独の中に生きていては、正気を保つことは出来ません。しかし人とのつながりができて、少しでも自分の存在価値を認めてくれる人がいれば、たとえそれがどんなに小さいものであれ、人は人として回復していくことができる、そのように思わされる出来事でした。

佐々木さんの教会では、毎日そのような愛の出来事が起きています。私はそれを「神様の出来事」と呼びたいと思います。それは社会から見たら小さなことかもしれませんが、当事者本人にとっては、本当に、

本当に大きな回復の出来事だからです。

(六月十七日 大学)

人生とは何か



宗教センターチャプレン（仙台南伝道所牧師） 佐藤 由子

ルカによる福音書 六章二〇～二六節

20 さて、イエスは目を上げ弟子たちを見て言われた。

「貧しい人々は、幸いである、

神の国はあなたがたのものである。

21 今飢えている人々は、幸いである、

あなたがたは満たされる。

今泣いている人々は、幸いである、

あなたがたは笑うようになる。

22 人々に憎まれるとき、また、人の子のために追い出され、ののしられ、汚名を着せられるとき、あなたがたは幸いである。23 その日には、喜び踊りなさい。天には大きな報いがある。この人々の先祖も、預言者たちに同じことをしたのである。

24 しかし、富とんでいるあなたがは、不幸ふこうである、

あなたがはもう慰なぐさめを受けている。

25 今いま満腹まんぷくしている人々ひとびと、あなたがは、不幸ふこうである、

あなたがは飢うえるようになる。

今いま笑わらっている人々ひとびとは、不幸ふこうである、

あなたがは悲かなしみ泣なくようになる。

26 すべての人ひとにほめられるとき、あなたがは不幸ふこうである。この人々ひとびとの先祖せんぞも、偽にせ預言者よげんしゃたちに同じおなことをしたのである。」

(新共同訳)

みなさんは今、「幸せ」でしょうか。またみなさんにとっての「幸せ」とはなんででしょうか。本日の聖書箇所は、私達が思い描くこととは真逆のことを語っていました。最初の四つの「幸い」は、貧しさや飢え、涙や試練です。そして四つの「不幸」は、富、満足、笑顔、賞賛です。

何が幸せなのかということは、どの視点で物事をみるかということで大大きく変わります。たとえば、「失敗は成功のもと」ということわざがあります。失敗だけを見れば、それは不幸なことですが、その失敗こそが成功に続く道であることを知る時、失敗は不幸ではなく、幸いとなります。

イエスと共に生きる道には、苦難や試練があります。しかし人間は、苦難や試練がなければ、「人生と

は何か」と、問うことを忘れてしまいます。苦難や試練は「なぜ？どうして？」という問いを与えてくれます。この問いは、私達に命を与えた神、本当の幸せがある「永遠」の道へと導いてくれます。

私達には、生まれてから死ぬまでの時間だけではなく、その先に続く時間もありません。時間が続くという事は、歴史がすでに証明しています。そして有限があれば無限も存在するように、時間を超えたところに「永遠」があります。

本日の聖書箇所は、ルカによる福音書では「平地の説教」、マタイによる福音書では「山上の説教」と呼ばれる、イエスの説教の始まりの箇所でした。当時も今も、イエスに従う道を歩む人々は、この世界の基準では、決して「幸せ」とは言えないのかもしれませんが。

しかしイエスは、神と共に歩む「永遠」にこそ、本当の「幸せ」があると教えました。私達は、ひとときの幸せではなく、永遠に続く幸せを見いだす者でありましょう。見えるものだけではなく、見えないものを見ることを忘れずにいたいと思います。

私達には、必ず苦難や試練の時があります。しかしその時にこそ、私達は、大いに喜ぶものであります。そして苦難や試練に悲しむ人々と出会った時には、「その先に、主の幸いが必ずある」ことを知る者として、共に祈ることができるよう、日々、備えてまいりましょう。

(六月十八日 榴ヶ岡高等学校)



イエスは言われた。「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか。」彼は答えた。『心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」

(ルカによる福音書 10章26-28節)



岩の上に建てられた家

大学宗教授主任 藤野雄大

マタイによる福音書 七章二四〜二七節

24 「そこで、私のこれらの言葉を聞いて行く者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。
25 雨が降り、川が溢れ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである。
26 私のこれらの言葉を聞いても行わない者は皆、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に似ている。27 雨が降り、川が溢れ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れて、その倒れ方がひどかった。」

(聖書協会共同訳)

皆さんに一つ質問をさせてください。「今日六月二十五日が何の日か、ご存知でしょうか？」実は、今日は「住宅デー」という記念日なのだそうです。一九七八年、日本ではこの日を建設労働者への感謝と、住まいの大切さを考える日として決めました。「初めて聞いた」という人も少なくないでしょう。

では、次にこんな質問もしてみましよう。「なぜこの日が住宅デーなのか、その由来が分かりますか？」実は六月二十五日は、アントニオ・ガウディというスペインの有名な建築家の誕生日なのです。一八八二年に建設が始まり、現在もなお建築が続けられていることで有名な、スペインのサグラダ・ファミリアという教会があります。あの教会の設計者といえば、お分かりになるかもしれません。彼は敬虔なキリスト教徒であり、宗教的な名言をいくつも残したことで知られています。

例えば、ガウディは、建築の理想として自然界のものを模倣することを挙げました。神がお造りになった自然に存在するものが、最も合理的であり、必然的であり、そこにこそ美があるというのです。あるいは、ものづくりにおいて最も大切なのは愛であり、その次が技術であるという言葉も残しています。そして、彼の最も有名な言葉は、何十年かかってもサグラダ・ファミリアが完成しないことについて問われた際に、ガウディが答えた一言でしょう。「私のクライアント（神様のこと）は急いではいない。」

「神は急いでおられない。」このガウディの言葉には、急いで性急に作り上げたものには必ず綻びが生じる、仕事が雑になってしまう、だからこそ、時間をかけてゆっくと、丁寧に築き上げていくことが大切である、という意味が込められているのではないのでしょうか。

さて、ガウディの話から聖書に目を移しましょう。聖書においても、家を例えに用いた有名な教えがあります。それが今日の聖書箇所、マタイによる福音書七章二四節から二七節です。この箇所でも、「土台

の大切さ」をテーマに、イエス・キリストがひとつのたとえ話を語られました。イエス様はこう語り始めます。「そこで、わたしのこれらの言葉聞いて行う者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。」(マタイ七・二四)

この言葉は、私たちの人生を建物にたとえています。私たちの日々の営み、たとえば、勉強したり、人間関係を築いたり、目標に向かって努力したりするすべては、いわば、人生という家を建てているようなものです。しかし、どれほど外見が立派に見えたとしても、豪華で快適な家を建てたとしても、その土台がしっかりしていなければ、その家は倒れてしまうでしょう。それと同じことが、私たちの人生にも言えるのではないのでしょうか。社会的な成功を収め、たくさん給料を得たり、出世をしたり、多くの友人に囲まれたりして、人の目から見て羨まれるような人生は、一見すると素晴らしいものかもしれませんが、しかし、一見すると華やかに見える人生であっても、土台があやふやであれば、一度嵐が来たときに、すぐに倒れてしまうかもしれません。それに対して、岩の上に建てられた家、堅固な土台を持つ家は、困難にあっても決して揺らぐことはないのです。

では、イエス・キリストが言われた「岩の上に家を建てる」というのは、具体的にどういう意味でしょうか。それはイエスの言葉を「聞いて、行う」ということです。たとえば、「敵を愛しなさい」あるいは「恐れるな、わたしはあなたと共にいる」といった、イエス・キリストの語った言葉を、ただ知識として聞くだけでなく、実際の生活の中でそれを信じ、行動に移していくこと。そのひとつひとつの積み重ねこそが、人生の土台になっていくと言えるでしょう。

大学生という時期は、ある意味では、人生の土台づくり、基礎づくりの期間と言えます。今、このキャ

ンパスで、どのような言葉を聞くか、何を学ぶか、どのような人間関係を築くか、その一つ一つがみなさん一人ひとりの将来の人生という家を支える礎となっていくのです。皆さんは、自分の人生をどんな土台の上に建てていますか？どのような土台の上に、自分の人生という家を建てたいでしょうか。

聖書の言葉は、非常に長い歴史の中で多くの人々に読み継がれてきた言葉です。それは、時代の荒波にも耐えうる、真実の言葉です。イエス・キリストの言葉を聞いて、それを信じて生きる時、私たちの人生はどんな嵐がやってきても倒れない、強い家となるのです。焦る必要はありません。建築家ガウディがそうしたように、急がず、今日という日を大切に、毎日着実に、聖書の言葉を土台として積み重ねていくこと。それによって、皆さんの人生もまた、「堅固な家」のようになるのではないのでしょうか。

(六月二十五日 大学)



人生を変える秘訣

地域総合学部准教授 大澤 史 伸

フィリピの信徒への手紙 二章一三〜一四節

¹³あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです。¹⁴何事も、不平や理屈を言わずに行いなさい。

(聖書協会共同訳)

みなさん、こんにちは。私は地域総合学部・地域コミュニケーション学科の教員の大澤史伸といいます。大学では、「社会福祉概論」や「市民活動論」「NPO論」などを教えています。どうぞよろしくお願いいたします。

ところで、みなさんは、朝ドラを見ているでしょうか？NHKの連続テレビ小説『あんぱん』です。私は、毎朝、見ています。見られない時には録画をしてから、見るようにしています。この朝ドラの『あんぱん』は、アンパンマンを生み出したやなせたかしとその妻である暢のぶをモデルに、『アンパンマン』にたどり着くまでを描いている愛と勇気の物語です。

やなせたかし、ドラマでは柳井崇ですが、演じているのは、北村匠海さん、その妻・暢は、今田美桜（いまだ みお）さんです。主役を演じている今田さんは、一九九七年福岡県福岡市出身の現在、二一八歳です。今回のNHK「連続テレビ小説」『あんぱん』では主人公の役は、朝ドラの歴代最多となる三三六五人が応募したオーディションから選ばれました。

このように言うと、今田さんは、すごいなあ、自分とは違うんだなあ。と思うかもしれませんが、私も確かに凄いなあとと思いますが、ある時、テレビを見ていた時に、今田さんは、高校卒業後、大学に行かずに女優を目指すと思いましたが、ある時、両親から猛反対をされ、やっとのことで説得をして、同世代が大学を卒業する二二歳までチャレンジしてみても、ダメだったあきらめる、という条件付きで、本格的に女優を目指す始めました。また、デビュー当時は、オーディションに何度も落ちまくり、泣きながら福岡に帰ったこともあったそうです。

今田さんは、家族に反対されながらも、そして、何度もオーディションに落ちながら、時には泣きなが

ら福岡に帰ったりしながらも自分の夢を叶えたのです。今日の聖書の箇所は私たちが、自分の夢を叶えるための秘訣が書かれています。ともに、聖書を見ていきましょう。

私たちの人生を変えるための一の方法は、

① つまらないプライドを捨てること

この聖書の個所の主人公は、ナアマンという男です。一節を見て下さい。「アラムの王の將軍ナアマンは、主君に重んじられ、気に入られていた。主が彼によってアラムに勝利を与えられてからである。ただ、この人は力ある勇士であったが、既定の病を患っていた。」とあります。ナアマンはアラムの国の王であり將軍ですから名譽も地位もあり、人々から尊敬されているような人物でした。

ただ、彼は一つの問題を抱えていました。それは、死に至る病氣を持っていたということです。その病氣を治してもらうために、はるばるイスラエルまで来て、エリシャという人物に病氣を治してもらおうとするのです。一一節を読みます。「ところが、ナアマンは怒って立ち去り、こう言った。『私は、彼が自ら出てきて私の前に現れ、彼の神、主の名を呼んで、患部に手をかざし、病をいやすものとはかり思っていたのだ。』とあります。

ナアマンはエリシャに怒るのです。その理由は、エリシャが直接、ナアマンのところに来ないで、弟子をよこしたからです。ナアマンのプライドは打ち砕かれたことでしょう。ここで分かることは何でしょうか？自分の人生を変えるために必要なことは、つまらないプライドを捨てなければ新たな人生を生きることはできないということを示しているのです。

みなさんは、大学を卒業したら多くの人は就職をしますよね。はじめは下積みをしなくてはなりません。

大学まで卒業しているのに何でこんなことをしているんだろう。もうやめようという相談を受けることがあります。ここがポイントですよ。これまでのつまらないプライドを捨てられるかどうか。今後の人生を決めるのです。

② 単純なことを馬鹿にしないこと

二つ目のポイントは、「単純なことを馬鹿にしないこと」です。一〇節を読みます。エリシャは、使いのものをやって、「ヨルダン川に行つて、七度身を洗いなさい。そうすれば、あなたの体は元に戻り、清くなるでしょう。」と言わせた。とあります。このことにナアマンは怒るのです。なぜでしょうか？つまり、ナアマン將軍はこんな単純なことで自分の病氣は治らなかつたからです。

みなさんは、どうでしょうか？単純なことをしても、人生は何も変わらないと思つていませんか？例えば、英語を上達するには、まずは単語一つから覚えることも大切だし、野球を上達するためにはまずはバットを一回振ることから始まるのです。私たちが思う単純なことや小さなことを決して馬鹿にしてはいけません。全てはそこから始まるのです。

③ やり続けること

一四節をお読みします。「そこでナアマンは下つて行き、神の人の言葉どおり、ヨルダン川に七度身を浸した。すると、その体は、少年の体のように清くなつた。」とあります。ポイントはここです。「ヨルダン川に七度身を浸した」ということです。ナアマン將軍の病氣を治すためには、「七度身を浸す」ことが必要だったので。一度や二度ではありません。七度なのです。

聖書の言葉には全て意味があります。この七という数字は「完全数です」。ある聖書の解説書には、

「六」は人間の努力を表し、「七」は神の領域を表すとありました。私はこう考えます。ナアマン將軍の体は六度目までは全く変化がなく、七度目にヨルダン川に身を浸した時にあっという間に治ったのではないかと。

皆さんはどうでしょうか？一度や二度の失敗で何かをあきらめてしまったということはないでしょうか？決してあきらめてはいけません。成功するまでやり続けるのです。人間的な努力の向こう側に神の領域つまり、完全数の七があるのです。成功の秘訣は成功するまであきらめないことです。神の数字である完全数七を目指して歩んでいこうではありませんか？

最後に、あなたのためにお祈りをしたいと思います。どうぞ目を閉じて下さい。自分の人生を良きものに変えたい、自分の夢を実現したいと思っている人は胸の前で手をしっかりと組んで下さい。お祈りをいたします。

《祈り》

神様、どうぞ私たちが自分の人生を良きものに行うことができるように、自分の夢を実現することのできる力を与えて下さい。今日の聖書のメッセージのように、①つまらないプライドを捨てること、②単純なことを馬鹿にしないこと、③やり続けること、を通して人生を良きものに変えていくことができるように、私たちの人生に奇跡を起こすことができますように、助け、導いて下さい。このお祈りを私たちの救い主である主イエスキリストのお名前によってお祈りいたします。アーメン。

(七月十五日 大学)

あなたがたは、
主が恵み深い方だということを味わったはずです。
主のもとに来なさい。
主は、人々からは捨てられましたが、
神によって選ばれた、尊い、生ける石です。

(ペトロの手紙一 2章3-4節)





ウィリアム・ホーイ先生の警告

第八四回 水曜公開礼拝説教

院長・学長・宗教センター長 大西晴樹

ルカによる福音書 二二章五く六節

⁵ある人たちが、⁶「あなたがたはこれらの物に見とれているが、積み上がった石が一つ残らず崩れ落ちる日が来る。」

⁵ある人たちが、⁶「あなたがたはこれらの物に見とれているが、積み上がった石が一つ残らず崩れ落ちる日が来る。」

(聖書協会共同訳)

さきほどお読みした聖書の箇所は、イエスがエルサレム神殿の崩壊を予言した個所です。実際、イエスや弟子たちがその美しさに見とれていたエルサレム神殿ですが、ユダヤ王国を支配したヘロデ王がユダヤ人の歓心を買うために紀元前二〇年ごろから神殿を改築し、紀元後六四年に完成したといわれています。しかし、完成して間もなく、紀元後七〇年のユダヤ戦争の際に崩壊、ユダヤ人は離散、すなわち、ディアスポラとなり、イエスの予言は的中しました。弟子たちが驚嘆した頃、神殿の外観はほぼ出来上がっていて、正面は金箔で覆われ、日の出時にはあたかも太陽光線そのものを見つめるような、それはそれは見事なものであったといわれています。

ところで、皆さんは、本院三校祖の一人であるウィリアム・ホーイ先生をご存じでしょうか。東北学院には、押川方義、ウィリアム・ホーイ、デービッド・シュネーダーという三人の校祖がいます。押川先生は、アメリカ人宣教師に呼び掛けて東北学院、宮城学院を創設した人物。アメリカ人宣教師のホーイ先生はその押川先生の呼び掛けに応えて、初期のころの東北学院を精神的、財政的に支えた人物。シュネーダー先生はホーイ先生より少し遅れて着任し、二人の後継者として東北学院を発展させた人物です。毎年、五月十五日の東北学院創立記念日には、三人の校祖の肖像画がこの礼拝堂の正面に並べられて創立記念礼拝と式典が行われます。その後、バスに分乗し、教職員により北山のキリスト者墓地において墓前礼拝が行われ、三人の墓碑に、理事長、院長から花束が手向けられます。また東北学院大学には、三人の名前を冠する新しい建物があり、ウィリアム・ホーイ宣教師の名を留めるホーイ記念館は、土樋キャンパスの正門の真向かいにあるガラス建ての建物がそれであり、共同自修スペースであるラーニングコモンズや教室、研究室、カフェとして用いられています。そのホーイ先生ですが、初期のころの東北学院を精神的、財政

的に支えただけあって、私塾仙台神学校から五年後、東北学院 (North Japan College) と改名し、キリスト教による中等・高等教育を施す学校法人になるさいの開院式の演説の中で、イエスの予言と同じように厳しい口調で語っています。

少し長くなりますが読んでみましょう。「信仰、祈り、神との交わり、そして、イエス・キリストと日本人への奉仕のうちに、この学校を存続することを決断したのである。もしこれに失敗するなら、この学校を親身に思ってくれている人びとは、この学校がその頭石へと消えてなくなることに頓着しなくともよい。キリスト者の声が傾聴されなくなるとき、キリスト者の感化力がこれらの校舎で通じなくなるとき、凡ての梁を引き倒し、凡ての煉瓦を粉々にする破壊の手に一切を委ねなさい」(『東北学院開院式における W.F.E. ホーイの演説』一八九二(明治二五)年十一月十八日(英文)『東北学院百年史資料篇』八三四頁)。

なぜ、ホーイ先生は、東北学院開院式というめでたい祝典の演説の中でイエスの予言のような厳しい警告を發したのでしょうか。実は、東北学院開院式に先立つこと五年前の一八八六年に仙台神学校という私塾を創設してから、押川先生やホーイ先生にとって、東北学院という男子のミッションスクールの開院は苦勞に苦勞を重ねた結果でした。一方には、同じ宣教団体であるアメリカ・ドイツ改革教会の援助のもとに宮城女学院という女子のミッションスクールが一足先に東三番丁(いまの仙台国際ホテルのあたり)に開学しました。他方では、東北学院開院式の数か月前に廃校になりましたが、清水小路の現在の日本タバ

コ丁ビルあたりに、アメリカンボード（組合教会）という違う宣教団体の立派な男子校、宮城英学校、すなわち、東華学校が同志社大学の新島襄を校長として、県や市の後押しのもとに開学していました。東華学校は、廃校になったとはいえ、近代教育のモデルとして、現在の仙台一高や仁華高校に影響を与えています。東華とは、東に華々しいの華と書きますが二華高校の華は東華学校に由来します。それゆえホーイ先生は心中穏やかならぬ気持ちで、この開院式に臨んだわけでありました。とりわけ、南町通りの東北学院神学部の建物は、現在の仙建工業あたりに建てられました。残念ながら今から丁度八〇年前の一九四五年七月十日の仙台大空襲によって焼失しました。しかし、それはそれは、戦前の仙台において最も美しい建物のひとつといわれた建物でした。全体は赤レンガ造りのいわゆるカレッジ・ゴシック様式の二階建てで、一部は四角の五層の櫓やぐらを持ち、内部には四つの教室と礼拝堂、それに教授のための個室をいくつか備えていました。現在でもこれと似た建物が東京都港区白金台に現存しています。同じ改革派の明治学院の神学部です。もちろん私は八〇年前の仙台大空襲で焼失した東北学院神学部をこの目で確かめたわけではありませんが、櫓が組まれていた分だけ東北学院神学部の建物の方が立派だったように思えます。ホーイ先生は、竣工したばかりのこの建物を念頭に、開院式当日に厳しい警告を発したのです。

温厚なホーイ先生は決して乱暴な言葉使いをする方ではありませんでした。私は、この言葉にホーイ先生の東北学院のキリスト教教育に対する篤い想いと、そこに至るまでの苦勞を偲ぶことが出来ます。アメリカ合衆国ペンシルバニア州ランカスター市にあるランカスター神学校を卒業して、同大学最初の宣教師としてすぐに宣教師となり、二八歳の若さで来日しました。来日三日後、まだどこで働くかも、日本語もよくわからないときに、築地で会った仙台の牧師で、三五歳の押川の「自分のところに来て手つだってほ

しい」との呼び掛けに呼応して「視察」のために来仙しました。まだ仙台まで鉄道が開通していないときでしたから、東京から丸二日間かけて沿岸郵便船（メイール・ボート）に乗って石巻に到着し、小舟を使って塩釜に上陸し、人力車に数時間揺られて仙台入りしました。そして「視察」を終えて宣教団体の本部に宛てた手紙では、仙台において学校を設ける抱負をこのように述べています。

「わたしは仙台に落ち着く手はずを整えております。そうせざるを得ないからです。わたしに迫ってくる神の御力に逆らえないのです。不動産は低廉で、立派な家でも月に四円（ドル換算すれば、三・三五ドル。ちなみにホーイ先生が宣教団体からもらう給与は年俸七〇〇ドル）出せば借りることが出来ます。わたしはまず英語を教えることから取り掛かり、いずれは聖書と信仰問答を目指すつもりです。もしかすると、男子学校がそこから生まれるかもしれません。多くの前途有為な青年たちが私の来仙を心待ちにしています」（ウィリアム・メンセンディック著・出村彰訳『ウィリアム・ホーイ伝』東北学院、一九八六年、二八頁）。

そしてその学校が日の目をみたのです。一八八六年、いまから一三九年前、宮城女学院と異なり、アメリカ・ドイツ改革教会という宣教団体より男子校設立がまだ認められなかったときに、ホーイ先生は、日本家屋を借り、押川先生から委ねられた日本人の六名の神学生に寮を提供し、一年間彼らの生活の面倒を見る約束をして、東北学院の前身である私塾仙台神学校（Sendai Theological Training School）の授業を始めたのです。一八八六（明治十九）年五月、町はずれに近い木町通と北六番丁の角、現在の東北大

学病院のあたりです。東北学院は、私塾仙台神学校から数えて一三九年目を迎えており、その私塾の始まりに創立年を求めています。

さらにホーイ先生は、男子の学校、すなわち、東北学院の用地である旧本願寺別院、現在の仙建工業のあたりの南町通りの用地取得の際には、宣教団体が女子のミッシヨンスクールを先行させて、資金を出し渋っていた折に、自ら肩代わりして東北学院の用地の取得に動いたのです。開院式当日に「キリスト者の声が傾聴されなくなるとき、キリスト者の感化力がこれらの校舎で通じなくなるとき、凡ての梁を引き倒し、凡ての煉瓦を粉々にする破壊の手に一切を委ねなさい」と厳しい警告を発したホーイ先生には、それなりの理由があったのです。

翻って、その開院式から一三四年を経過した東北学院はどうでしょうか。東北学院は九学部一五学科に学生数一二〇〇人の学生を擁する東北・北海道地区最大の総合大学と、二つの高校、一つの中学、そして幼稚園を設置する私立総合学園に成長しました。また仙台都心の五橋には、真新しい建物が建てられ、各設置学校には素晴らしいキャンパスが整えられています。それらは、ホーイ先生がイエス・キリストへの信仰によってすべてをささげて創立した仙台神学校や東北学院に由来しています。建物や学校は立派になりました。しかし、その建物や学校の中で「キリスト者の声」Christian voices が毎朝聴かれない、「キリスト者の感化力」Christian influences が感じられないというのであれば、校祖の一人であるホーイ先生の思いを私たちは裏切ることになるのではないのでしょうか。われわれ、東北学院を引き継ぐ者は、信仰のあるなしにかかわらず、校祖から託された福音主義キリスト教に基づく人格教育という「建学の精神」に変わることなく永遠に忠実であり、LIFE…生命や個人の尊厳を大切にし、LIGHT…研究や部活の成果

で世の中を明るく照らし、「LOVE」：お互いに愛し合い、仕えあえる人間を輩出するための学びを進め、卒業生や地域の市民の皆様の賛同を得ていきたいと考えています。

(七月十六日 第八四回水曜公開礼拝)

はっきり言うておく。

世界中どこでも、この福音が宣べ伝えられる所では、
この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。

(新共同訳)

(マタイによる福音書 26章13節)





利他主義による平和

大学宗教授主任 大門 耕平

ルカによる福音書 一〇章二五〜三七節

25 すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」²⁶ イエスは言われた。「律法には何と書いてあるか。あなたはそのをどう読んでいるか。」²⁷ 彼は答えた。「『心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」²⁸ イエスは言われた。「正しい答えた。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」²⁹ しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、私の隣人とは誰ですか」と言った。³⁰ イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追い剥ぎに襲われた。追い剥ぎたちはその人の服を剥ぎ取り、殴りつけ、瀕死の状態にして逃げ去った。³¹ ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、反対側を通って行った。³² 同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、反対側を通って行った。³³ ところが、旅をしていたあるサマリア人は、その場所に来ると、その人を見

て気の毒に思い、³⁴ 近寄って傷にオリブ油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。³⁵ そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』³⁶ この三人の中で、誰が追い剥ぎに襲われた人の隣人になったと思うか。』³⁷ 律法の専門家は言った。「その人に憐れみをかけた人です。」イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

(聖書協会共同訳)

あるところに、一人の羊飼いの少年がいました。彼は退屈しのぎに「狼が来た！」と嘘をついて騒ぎを起こします。騙された大人たちは武器を持って助けに駆けつけますが、無駄足に終わります。少年が何度も同じ嘘をついたので、本当に狼が現れた時、大人たちは信用せず、誰も助けに来ませんでした。結果、少年も村の羊もすべて狼に食べられてしまったという物語。

この話は、おそらく誰もが子どもの頃に聞いたことがあると思います。そして、多くの場合、「嘘をついてはいけない」という教訓を読み取ったはずですが、しかし、この物語を大人になって、あるいは異なる視点から改めて読むと、また違った教訓が見えてきます。

このような物語はたとえ話、あるいは寓話と呼ばれます。たとえ話の面白いところは、一つの明確な答えを与えることを目的としていない点にあります。イソップ寓話のように、擬人化した動物などを主人公にしなげら、読み手や聞く人の立場、状況に応じて様々な視点を提供してくれます。

たとえば、この「狼少年」の物語は、学校の教員研修で用いられることがあります。この場合、教師は子どもとの関わり方について深く考えさせられます。たとえ何度も嘘をつく子どもがいたとしても、その存在を見捨てること、関わりを止めることは決してしてはいけません。子どもが嘘をつく背景には何があるのか、なぜ嘘をつくのか。教師として、子どもに寄り添った教育を実現するために何が必要かをともに考える、豊かな教材となるのです。

このように、たとえ話は、読む人、読む状況、考えることによって、様々な視点と教訓を与えてくれる豊かさを持っています。新約聖書に示されているイエスも、多くのことをたとえ話で教えました。彼は「この答えが正しい」と示すのではなく、「あなたはこれをどのように読むか、どのように考えるか、今のあなたの生きる社会はどうであるのか」と、私たち一人ひとりに問いかけているのです。

本日の聖書箇所も、イエスによる有名なたとえ話、「良きサマリア人の物語」です。この物語は、ルカによる福音書にのみ記載されており、隣人愛について考える文脈で語られています。

物語は、ある人が追いはぎに襲われ、瀕死の状態で倒れている場面から始まります。そこに通りかかったのは、まず祭司とレビ人でした。彼らは礼拝を司る役割を担う人々であり、二つの選択肢に直面します。一つは、祭司としての清さを保つために、遺体に近づかないという律法を遵守すること。もう一つは、レビ記に記されている「他者を自分自身のように愛しなさい」という隣人愛の規定を遵守することです。祭司やレビ人は、おそらく自身の清さを選択し、倒れている人の反対側を去っていきました。

その後に通りにかかったのが、サマリア人です。サマリア人は、倒れている人を見て気の毒に思い、彼に

近寄りました。傷の手当てをし、自分のロバに乗せて宿屋に運び、翌日には宿屋の主人に費用を払い、世話を頼みました。サマリア人は、倒れている人に共感し、自分のできる限りのことを選択したのです。

そして、イエスは言います。この倒れている人に近づいたサマリア人こそが隣人になった人であり、あなたもそのようにしなさい、と。この物語は、私たちが他者の隣人になること、隣人になる意志を持つことを強く求めています。

さて、このたとえ話を、あなたは今の時代、どのように読むでしょうか。どのような社会状況と重ね合わせて読むでしょうか。襲われた人は誰でしょうか。見て見ぬふりをした祭司やレビ人は、現代社会の誰に当てはまるでしょうか。そして、サマリア人になるために、私たちには何が必要でしょうか。

アメリカの公民権運動を指導したマーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師は、このたとえ話を当時のアメリカ社会と重ね合わせて理解しました。彼は次のような実話を語りました。ある黒人大学生のバスケットボールチームが交通事故に遭い、三人が負傷しました。救急車が呼ばれましたが、白人の救急隊員は「黒人にサービスするのは私の方針ではない」と搬送を拒否しました。通りすがりの人が代わりに搬送しましたが、搬送先の病院の医師も「黒人をこの病院に受け入れることはできない」と拒絶しました。結局、八〇キロ離れた黒人専用病院に運ばれた時、すでに一人は亡くなっており、残りの二人も間もなく息を引き取ったのです。

キング牧師は、この救急隊員や医師は、良きサマリア人の物語における祭司やレビ人と同じように、黒人の隣人になることを拒んだのだと述べました。彼はこの事例を分析し、利己主義と利他主義の構造につ

いて説きました。

祭司やレビ人、そして救急隊員や医師は、目の前にいる人を見た時に、「もし私が彼を助けるために立ち止まったら、私はどうなるのか」という利己的な疑問を持ったのです。一方でサムリア人は、「もし、私が旅人を助けなかったならば、彼はどうなってしまうか」という利他的な疑問を持ったのです。キング牧師は、この利他的な精神こそが、分断された社会で人と人をつなげるために必要なものであると提唱しました。

ルカによる福音書は、倒れている人に共感し、その人に近寄るサムリア人の姿を隣人愛として伝えています。そしてキング牧師は、利己主義ではなく「もし私が旅人を助けなかったならば、彼はどうなってしまうか」という利他主義の精神こそが、社会をより良くするために必要であると読み取りました。

今、私たち東北学院に関わるものとして、この物語をどのように読むことができるでしょうか。明治期に宣教師によって伝えられたキリスト教が定着する時、そこには社会福祉や教育が宣教とともにありました。二人の教師と六人の生徒で始まった東北学院の歴史においても、このサムリア人の物語は脈々と読み継がれてきたはずですよ。

創立者である押川方義先生やホイイ先生は、六人の生徒のために、「この子たちに私たちが教育を果たさなければ、彼らはどうなってしまうのか」という強い隣人愛を抱いていました。そして、この東北学院は、キリスト教主義教育の中で、「もし私が旅人を助けなかったならば、彼はどうなってしまうか」という志を持って、社会の中で活躍する多くの先達を輩出してきた歴史を持っています。

今、私たちは「良きサマリア人」の物語をともに読む機会を与えられました。世界に目を向ければ、不安や恐れ、命の危機に瀕している方々が多くいます。また、私たちの身近な日本の中でも、多くの人々が様々な困難の中におかれています。

私たちはどのような社会を作っていくべきなのでしょう。そして、そのためにどのような意志を持っていく必要があるのでしょうか。「もし私が旅人を助けなかったならば、彼はどうなってしまうか」という利他主義の意志を持つことの重要性を、この機会に改めて心に刻みたいと思います。可能であれば、この問いを胸に、ともに語り合う時間を持つことができると願います。

(八月四日 大学)



いつか終わるもの

東北学院中学校・高等学校 聖書科教諭 成 智 圭

マタイによる福音書 二六章三六～四四節

36 それから、イエスは弟子たちと一緒にゲツセマネという所に来て、「わたしが向こうへ行つて祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。37 ペトロおよびゼバイの子二人を伴われたが、そのとき、悲しみもだえ始められた。38 そして、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい。」39 少し進んで行って、うつ伏せになり、祈って言われた。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」40 それから、弟子たちのところへ戻つて御覧になると、彼らは眠っていたので、ペトロに言われた。「あなたがたはこのように、わずか一時もわたしと共に目を覚ましていられなかつたのか。41 誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」42 更に、二度目に向こうへ行つて祈られた。「父よ、わたしが飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのでしたら、あなたの御心が行われますように。」43 再び戻つて御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠かつ

たのである。44そこで、彼らを離れ、また向こうへ行つて、三度目も同じ言葉で祈られた。

(新共同訳)

世の終わり、と聞くと、どうしてもピンときません。イエスが思いがけないときにくる、と言われても、はてどういうことだろう、そうなると思います。でも一つわかるのはその日は必ず訪れる、と今日の聖書で言われている、ということです。

私たちには、人それぞれ予定があります。学校には行事予定があります。私は中一の担当なので、十月に研修旅行があるな、楽しみだな、と思っています。直近でいうと、学院祭もありますね。

個人でいうと旅行の予定などがあるかもしれません。特に楽しみにしている予定ほど、早くその日がこないかな、と思うほど、時の流れが遅いと感じてしまいます。逆に、試験など、いやな予定ほど、時の流れを早く感じてしまうものです。

でも、いずれにしても、その日は必ず訪れます。これは当たり前のことです。

そして実は私たちにとっては、死ぬことも、そうです。私たちにあって、いつのまにか始まった人生、これは、いつか必ず終わります。死というのは、一人一人の予定に必ず入っています。しかし、いつかはわかりません。いつかはわからないけど、必ず、その予定の日は訪れます。

もし私たちが一週間後に死ぬことを今日知ったら、どうするでしょうか。ゲームをやる予定だったけど、キャンセルして家族と過ごすかもしれません。学校の友達との時間がより大切になるかもしれません。一

分一秒も、無駄にしたいかと思いかもしれません。

私たちは、常に、希望を持って生きることが求められています。しかし今日の聖書で、神は同時に、与えられた今日一日を、限られた一日として、精一杯、生きて欲しい、生き抜いてほしい、本当に大切なことに心をむけて欲しい、そう願っているのではないでしょうか。

(八月二十九日 中学校・高等学校)



神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。

(ヨハネによる福音書 3章16-17節)



愚かさも賢さもなく

宗教センター主事（仙台富沢キリスト教会牧師） 阿部 頌栄

マタイによる福音書 二六章六〜一三節

6 さて、イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンのおられたとき、7 一人の女が、極めて高価な香油の入った石膏の壺を持って近寄り、食事の席に着いておられるイエスの頭に香油を注ぎかけた。8 弟子たちはこれを見て、憤慨して言った。「なぜ、こんな無駄遣いをするのか。9 高く売って、貧しい人々に施すことができたのに。」10 イエスはこれを知って言われた。「なぜ、この人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれたのだ。11 貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない。12 この人はわたしの体に香油を注いで、わたしを葬る準備をしてくれた。13 はっきり言うておく。世界中どこでも、この福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。」

（新共同訳）

今日の弟子たちの言葉は、わたしたちが日常的に向き合っている言葉そのものです。「なんでこんな無駄なことをするのか」。無駄の多い行動は、非効率。無駄なく目標を達成できる人間は優れた人間である。そんな風に、わたしたちは日々、わたしたち自身の「賢さ」を残酷に計られています。受験勉強なども、典型的に、そういったものになっているでしょう。

これはわたしたちが「タイパ時代」に生きているから、効率的に社会を形成できるように、現代になって、特別に、強く求められ問われるようになったのでしょうか。いいえ。そうではなく、どんな時代であっても、社会では、そんな基準で人の価値が判断されてきたのです。そんなことが今日の聖書の物語からわかるでしょう。

…でもどうでしょう。皆さまは今日の弟子たちのこの言葉を聞いてどう感じられたでしょう。弟子たちの言葉は、正しい。弟子たちの判断は、賢い。この女性のふるまいは間違っている。この女性は愚かだ。本当に？

今日の言葉を前にするとき、わたしは言いようのない痛みを憶えます。その言葉に適応できないことが、不適合であるかのような、この言葉。この言葉は、賢さや効率を言い訳にして、何かを誰かを、切り捨てている中で語られている言葉ではないでしょうか。この言葉は他の人への苛立ちの中で語ってしまったている言葉ではないでしょうか。そして、この価値観、正しさを内面化させて、他の人を切り捨てるときに、実は同時に、わたしがわたし自身にそんな言葉を向けているのではないのでしょうか。賢くない人間は、正しく生きることができない人間は、生きている意味なんてない。

改めて考えてみたいのです。この女性が行ったことは、愚かなことだったかもしれません。そのことを彼女は自分自身で知らなかったでしょう。皆さまはどう思われますか。彼女は、自分のやっていることをどう感じながら行っていたでしょう。周囲からの痛いほどの視線を受けながら。

ですがそれでも、彼女はこのことを、イエスさまの頭に香油を注ぐことを行ったのでした。その中には、この女性の言葉に尽くせない、想いが込められています。

愚かであることを知りつつも、それを行う。誰に何を言われても揺るがない、大切にしなければならぬ女性の確信が表れています。それを愚かだと笑うことは簡単です。ですが、笑う前に、考えていただきたいのです。たとえ愚かであっても、正しくなくとも、非効率であっても、やらなければならぬこと。自分のいのちを、想いを向けなければならぬこと。そのように愚かさも賢さによっても、過ちも正しさでもなく、それらによって変えてはならないもの。心が揺さぶられるもの。向き合うべきもの。彼女はそれに向き合い、その想いを表そうとしました。この心が揺さぶられるもの、変えてはならないもの、大切なもの。それを、皆さんは持っているでしょうか。

どうでしょう。難しいでしょうか。これは大人にとっても難しいことです。簡単には答えが出ないことですし、考え続けるべきことなのでしょう。でもだから、このことは、わたしたちが考えるべき、取り組むべき価値のあることです。わたしたちがひと時足を止めて、この問いを探すが、例えばこの礼拝の間なのでしょう。それを探すが、学びであり、人間が生きるということなのでしょう。今日はそのこと

を、聖書の物語から、皆さんと分かち合いました。

(九月八日 中学校・高等学校)



礼拝の沈黙

東北学院中学校・高等学校 宗教主任 松井浩樹

マタイによる福音書 二六章五七〜六八節

57 人々はイエスを捕らえると、大祭司カイアファのところへ連れて行った。そこには、律法学者たちや長老たちが集まっていた。58 ペトロは遠く離れてイエスに従い、大祭司の屋敷の中庭まで行き、事の成り行きを見ようと、中に入って、下役たちと一緒に座っていた。59 さて、祭司長たちと最高法院の全員は、死刑にしようとしてイエスにとって不利な偽証を求めた。60 偽証人は何人も現れたが、証拠は得られなかった。最後に二人の者が来て、61 この男は、『神の神殿を打ち倒し、三日あれば建てることのできる』と言いました」と告げた。62 そこで、大祭司は立ち上がり、イエスに言った。「何も答えないのか、この者たちがお前に不利な証言をしているが、どうなのか。」63 イエスは黙り続けておられた。大祭司は言った。「生ける神に誓って我々に答えよ。お前は神の子、メシアなのか。」64 イエスは言われた。「それは、あなたが言ったことです。しかし、わたしは言っておく。

あなたたちはやがて、

人の子が全能の神の右に座り、

天の雲に乗って来るのを見る。」

65そこで、大祭司は服を引き裂きながら言った。「神を冒瀆した。これでもまだ証人が必要だろうか。諸君は今、冒瀆の言葉を聞いた。66どう思うか。」人々は、「死刑にすべきだ」と答えた。67そして、イエスの顔に唾を吐きかけ、こぶしで殴り、ある者は平手で打ちながら、68「メシア、お前を殴ったのはだれか。言い当ててみる」と言った。

(新共同訳)

最後の晩餐からユダの裏切りによつての逮捕、そして今日は裁判へと進んでいきます。ファリサイ派や祭司長たちの思い描いた、当初の計画通り、いやそれ以上に、イエスを十字架につけることが着実に前進をするのです。

しかしながら今日の、この裁判になつて、主イエスを死刑に値するような証言が得られないという事態が起こります。裁判を開いた、最高法院をつかさどる人々は大いに困つてしまふという状況がわかります。せっかく、弟子の一人のユダを買収してまで、ここまでできたのに、後一步のところではイエスを十字架につける計画が止まつてしまつたのです。

その一方、主イエスは、どういふ態度だつたのでしょうか。雄弁に自身の潔白を主張したのでしょうか。そうではありませんでした。驚くべきことに、裁判という公平で正義が主張されるべき場であるにも関わ

らず、何を聞かれても主イエスは答えません。沈黙を、無言を貫き通したのであります。そして最後、メシアかと問われて、たった一言「そうです」と答えた。それで、「神を冒瀆したという」理由のみで、死刑の決議がなされる。しかもその挙げ句、集団に取り囲まれ、まったく抵抗する素振りもない中で、想像し難い、ひどい暴力を受け続けるのです。

ここで主イエスの一貫した無言、無抵抗の姿に思いを馳せてみましょう。弟子たちに裏切られた挙げ句、逮捕された以上、無駄な抵抗は意味がないと思ったのでしょうか。あるいはまた、弟子たちによる裏切りから精神的にも弱まっていたし、聖書の記事に描かれなくても事あるごとに暴力を受け続けて肉体的にも、立っていることすら難しい状況であったのでしょうか。今、言いました主イエスの姿は、あなたがち間違っではないと思います。しかしながら、マタイ福音書の文脈は、弟子たちに裏切られ、逮捕され、裁判をうけ、十字架の犠牲になる、この一連の流れこそ、神の御心であり、ご計画であったとの主イエスの確信があったからこそ沈黙し、無言で無抵抗の態度を、ある意味積極的に貫いたのだ、というのがこれまでの文脈であります。

ですから、十字架の場面は、周りは十字架につけろと興奮している様の一方で、正反対とも言えるキリストの態度、「沈黙」が際立っているのであります。例えば、私たちもどうでしょう。今から、誰も話してもならない。動いてもならないと言われたとしましょう。三〇秒をすぎる前から、なんとなく、不安になる。落ち着かなく、そわそわする思いに駆られるのは、私だけではないでしょう。

つまり私たちにとって、沈黙するということは、基本的には喜びの行為ではないのです。「沈黙」と言えばむしろ、闇の世界、もっとというと「苦しみ」ともいえる言葉として認識されるでしょう。ですから「沈

黙」ではなく、にぎやかに楽しく、話をする、いやもつと体全体を使って喜びを表現する、今日の記事で言えば自分の正しさを弁明する。それこそが私たちの本来の姿であります。

ところが主イエスは、ご自身の命に関わる場面において、捕らわれの身になられ、そして沈黙を貫かれたのです。先ほど、主イエスは神の御心であると確信をして、といました。その神の御心とは、私たち人間が苦しむすべての状態を解放するために、自ら「捕らわれていく」ということに他ならないのです。

私たちのすべてをご存知であられる、主イエスであります。またそれゆえに、捕らわれ、沈黙を貫き、ついには十字架で犠牲となられた主イエスであります。私たちもこの礼拝にて、その神の御心を知るべくして、わずかな時間でありますが、沈黙を目指したいと思えます。そこにおいて初めて、高ぶる心を沈め、自らを相対化し、冷静な判断ができますのであります。高ぶる心を沈め、自らを相対化し、冷静な判断のもと、一日を始め、御心にかなう歩みを続ける私たちであるのです。

《祈り》

主なる神よ。今、感謝と喜びの礼拝をささげられますことを感謝いたします。私たちのかたくなな心を砕き、重荷を拭い去ってください、大いなる守りのうちにおいてください。この祈りを主の御名によって祈ります。アーメン

(九月十六日 中学校・高等学校)



初心に帰れ

大学宗主任 岡田 勇 督

ヨハネの黙示録 二章一〜七節

1 エフエソにある教会の天使に、こう書き送れ。『右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が、こう言われる。2 『私は、あなたの行いと労苦と忍耐を知っている。また、あなたが悪しき者たちに我慢できず、自ら使徒と称して実はそうでない者たちを試し、その偽りを見抜いたことも知っている。3 あなたはよく忍耐して、私の名のゆえに忍び、疲れ果てることがなかった。4 しかし、あなたに言うべきことがある。あなたは初めの愛を離れてしまった。5 それゆえ、あなたがどこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行いをしなさい。悔い改めないなら、私はあなたのところへ行つて、あなたの燭台をその場所から取りのけよう。6 しかし、あなたには良いところもある。ニコライ派の者たちの行いを憎んでいることだ。私もそれを憎んでいる。7 耳のある者は、霊が諸教会に告げることを聞くがよい。勝利を得る者には、神の楽園にある命の木の実を食べさせよう。』

(聖書協会共同訳)

暑い日は続きますが、夏休みが終わり、早くも大学の後期がやってきました。皆さんは、夏休みをどのように過ごしたでしょうか。たくさん遊んだという人がいるとすれば、それは素晴らしいことです。大学生は大いに学ぶべきですが、それと同時に大いに遊ぶべきでもあります。それは遊びも学びの重要な一部であるからです。いろいろな活動で夏休みを忙しく過ごしていたという人もいるかもしれません。アルバイトやボランティア活動などに専念しているうちに、いつの間にか夏休みが終わっていたという人も少なくないかもしれません。それぞれが思い思いの仕方、夏休みという貴重な時間を過ごしてきたことと思います。

しかし、時折みなさんのなかで、こんな疑問が浮かぶことはないでしょうか。「あれ、何のために大学に入ったんだっけ」。場合によっては疑問とは呼べないほどの小さな小さな違和感かもしれません。「この調子だと、大学生活すぐ終わってしまうような気がするけど、このままでいいんだろうか」。光陰矢の如しとはよく言ったもので、学生生活という貴重な時間は次から次へと過ぎ去っていきます。もしかしたら、皆さんはこの大学に入学した当初、あるいは四月に新年度が始まったときは、学生生活の明確なイメージや、はっきりした目標を持っていたかもしれませんが、こういう学生生活を送りたい、こういう目標を成し遂げたい。今の自分の姿は、そのもともと思いが描いていた理想と比べてどうでしょうか。夏休みが終わり、後期が始まった九月は、そのようにして大学に入学した時の初心を思い返してみるいい機会なのかもしれません。

今日先ほどお読みしたヨハネの黙示録の聖書箇所でも、おおざっぱに言えば〈初心〉を思い出せ、という内容が語られています。この箇所では、ヨハネの前に現れたイエス・キリストが、エフェソという場

所にある教会に書き送れと言っている手紙の内容になります。ここではエフェソの教会の良い点と悪い点が挙げられています。一方で、二節にあるように、エフェソの教会の人たちの「行いと労苦と忍耐」はとても高く評価されています。この手紙が書かれたと言われる時代は、ローマ帝国によるキリスト教徒への迫害がしばしば行われていたので、その迫害にも拘わらず強く信仰を守ったことが賞賛されているでしょう。しかしながら他方で、四節にあるように、イエス・キリストはエフェソの教会の人々に厳しい言葉も投げかけます。四節「あなたは初めの愛を離れてしまった」。「初めの愛」とは具体的に何であったのかは、ここには書かれていません。いったいどのような形で、エフェソの教会の人々が「初めの愛を離れてしまった」のかもわかりません。もちろん、これは「神に対する愛」「イエス・キリストに対する愛」としての信仰と、そこから離れてしまったことが第一義的な意味でしょう。しかしこの言葉、「初めの愛を離れてしまった」という言葉は、宗教的な信仰以外にも、私たちの人生のさまざまな重要な場面を思い起こさせてくれる含蓄のある言葉です。「初めの愛」。わかりやすい例は、恋人に対して抱いていた気持ち が失われてしまった、というような状況でしょうか。しかしそれだけではなく、皆さんが大学に入る前に抱いていた情熱、大学に入ったからにはこういうことをやってみたいという想いも、ある意味で失われてしまった「初めの愛」、忘れられてしまった初心として考えることができるのではないのでしょうか。

続く五節は、初心を忘れてしまったエフェソの教会の人々に対する勧めです。五節「それゆえ、あなたがどこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行いをしなさい」。最初に持っていた情熱が今になくなってしまっているとき、それはどこかの地点から徐々に失われてしまっていたはずです。それゆえ、いったいどの地点から自分が変わってしまったのかを思い出して、振り返って初心に返ることを説くので

す。ちなみに、ここで「悔い改め」と書かれている言葉ですが、これは原語のギリシャ語ではメタノエオーと言います。単に宗教的な（悔い改め）を指すだけではなく、考え直すこと、のちになって考えを変えることなど、とても広い意味に用いられます。その意味で、悔い改めは初心に立ち返ることである、とも言うことができるでしょう、

このように考えると、ヨハネの黙示録のこの箇所の言葉は、宗教的・キリスト教的信仰に限ったことではなく、みなさんにとってもとても重要なメッセージを含んでいるはずですよ。つまり、最初はみなさんは「初めの愛」、やる気に満ちた情熱を抱いていた。大学に入ったら、新学年になったらこんな新しいことにチャレンジしてみたい、自分のこんな得意なことをもっと極めてみたいという初心があったはずですよ。しかし、その初心がいつからか失われてしまった。それは夏休み中の自堕落な生活の中でもかもしれませんし、あるいは一見充実しているけど、大きな目的を見失わせるバイト生活の忙しさかもしれません。そのような皆さんに今聖書が語りかけるのは、初心を思い出すこと、何のために自分はここに立っているのかということ、そして「悔い改めて」、すなわち改めて考え直すことによって、自分の初心に、「初めの愛」に改めて立ち返るということではないでしょうか。

初心に立ち返れ。これがまさに、今から二〇二五年度の後期を始めようとしている皆さんに聖書が求めていることです。どんなことでも構いません。大学の入学時、あるいは四月に今年度が始まった時でもいいですが、何かこういう初心、こういう理想を抱いていたなということを思い出して、それを実践する一学期にしてほしいと思います。四年生にとっては、大学での最後の一学期としてこれはとくに大きな意義をもつチャレンジでしょう。もう学生生活が残り少ない分、その貴重な価値が身に染みて理解していると

思います。卒業後の進路がもう決まっている人もいるかもしれませんが、就活や仕事とは必ずしも関係のない、学生の自分を追及してみてください。二年生と三年生は、まだ時間が多く残されているうえに、学生生活にも慣れていると思います。これからが学生生活の本番と思って、改めて初心に立ち返ってみてください。新しいことにも積極的に挑戦してほしいと思います。最後に一年生ですが、半年大学生活を過ごしてみていかがでしょうか。「大学なんてこんなものか」というような、悪い意味でのあきらめのようなものが心を支配していませんか。大学生活を始めたばかりの皆さんは、まだ（初心）というものに一番近い存在です。改めて、入学前の気持ちを思い出して、自分がどんなことをやってみたかったのか、どんな学生生活を送りたかったのかを思い出しながら、後期の始まりを迎えていただきたいと思います。

（九月十九日 大学）



さて、イエスは目を上げ弟子たちを見て言われた。

「貧しい人々は、幸いである、

神の国はあなたがたのものである。

今飢えている人々は、幸いである、

あなたがたは満たされる。

今泣いている人々は、幸いである、

あなたがたは笑うようになる。」 (新共同訳)

(ルカによる福音書 6章20-21節)



言葉の本質

日本基督教団 仙台東六番丁教会牧師 中本 純

ヨハネによる福音書 一章一節

1 最初に言があった。言は神と共にあった。言は神であった。

(聖書協会共同訳)

私たちが生活する中で無くてはならないものの一つに「言葉」があります。言葉は私たち人間が生きていくこの世界を支配する大きな要素です。それは、私たちが毎日の営みを送る中で大なり小なり影響を被る要素であると言えます。時にそれは、私たちの心に深く突き刺さるトゲになることもあれば、その反対に落ち込んでしまった私たちの心をもう一度立ち上がらせてくれる大きな励ましにもなります。何故ならば「言葉」というのは、それを発する者の「人格の投影」であるからです。それはもつと言うと、「言葉とは人格そのもの」であると言えます。言葉を発する者とそして聞く者との人格が触れ合う手立てであると言えます。そして、この社会の営みの中で私たちは様々な「言葉」に出会い、より豊かな「人格」を形成していくよう成長させられます。だからこそ、私たちは「言葉」というものに重きを置いて生きていくと言うことができます。

そうした中で聖書は私たちが知っているつもりでいる言葉というものが、実はその本質を神に置いていることを伝えます。新約聖書の『ヨハネによる福音書』一章一節にこのように書かれています。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。」聖書が伝える「神の言葉」。それはイエス・キリストを指しています。イエス様は神の独り子でありながら、クリスマス之夜に人間としてお生まれになりました。それは、イエス・キリストという「言葉」を通して、神がどのようなお方であるのかを私たちが知するためです。神の言葉は神の人格（神格）そのものを表しています。そうした時に、新約聖書に収められている四つの福音書、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネこれらの福音書が伝えているイエス・キリストの姿を通して私たちは神がどのようなお方であるかを知るようにされています。もっと言うと、キリストが語った言葉と、そして行いによって知るようにされています。

フランスの言語学者のフェルディナンド・ソシュールという人がいます。この人は私たちが日常で用いている言葉（言語）というものを、「シニフィアン」と「シニフィエ」という二つの機能に分けて捉えることができる定義しました。シニフィアンとは「音声的・記号的機能」のことで、つまり「ここに」「きれいな花が」「咲いている」という感情抜きの情報としての機能。そして、もう一つの「シニフィエ」は「概念的機能」で「ここに」「きれいな花が」「咲いている」という情報に紐付けられた様々な感情や概念としての機能であると言います。もしも、神の言葉をソシュールの言うところの「シニフィアン」と「シニフィエ」の二つに分けてみたとします。イエス・キリストが「諭え話」を用いながら教えた様々な教えは、人々に神の国を伝える情報として伝えられ、同時にイエス・キリストが病気で苦しむ人や悪霊に取りつかれた人を癒し、救いへと導いた行動は神の国の原風景を伝えるものとして受け止めることができると思います。

イエス・キリストは神様のたった一人の子どもです。けれども、そのような神様の子どもを私たち人間はお城のベッドでお迎えした訳でもなければ、柔らかい毛布にくるんでお迎えした訳でもありません。私たち人間は、動物が繋がれている家畜小屋で神様の子供をお迎えして、それら動物が食べる餌を入れる飼料の葉桶の中に寝かしつけたのです。一見、美しい物語に見られがちですが、しかしよく見るとそこには人間が抱える罪の現実というものが既に据えられていたことに気付かされます。誰もが「幸せになりたい」そう願いながら、しかし気が付けばお互いに言葉のトゲを振り回し、傷つけあいつまっています。そうした人間のどうしても越えられない壁というものを、神はその愛に満ちた「本当の言葉」であるイエス・キリストを通して乗り越えさせてくださるのです。たとえ、動物が繋がれている家畜小屋で迎えられるも、動物の食べ物を入れた飼料の葉桶で迎えられるも、それでも神は私たち人間を「愛し

ている」と言うのです。それこそが言葉の本質であると言えます。

《祈祷》

天の父なる神様。

聖書は言葉を紹介して私たちに働きかけ、愛を伝える神の姿を伝えます。この困難な時代にあつて、私たちを生かし、励ます言葉をどうぞお与えください。

東北学院大学の学生みなさんに祝福がありますように。大学で働く教職員お一人お一人に豊かな恵みがありますように。

このお祈りを救い主、イエス・キリストのお名前によってお祈りします。
アーメン。

(十月二日 大学)



掟を破られたイエス

大学宗教授 渡邊 有美

ヨハネによる福音書 九章一三〜二三節

13 人々は、前に目の見えなかった人をファリサイ派の人々のところへ連れて行った。14 イエスが土をこねてその目を開けられたのは、安息日であった。15 そこで、ファリサイ派の人々も、どうして見えるようになったのかと尋ねた。彼は言った。「あの方が私の目にこねた土を塗りました。そして、私が洗うと、見えるようになったのです。」16 ファリサイ派の人々の中には、「その人は安息日を守らないから、神のもとから来た者ではない」と言う者もいれば、「どうして罪のある人間が、こんなしるしを行うことができるだろうか」と言う者もいた。こうして、彼らの間で意見が分かれた。17 そこで、人々は目の見えなかった人に再び言った。「目を開けてくれたということだが、お前はあの人をどう思うのか。」
「預言者です」と彼は言った。

18 それでも、ユダヤ人たちはこの人について、目が見えなかったのに見えるようになったということ信じなかった。ついに、目が見えるようになった人の両親を呼び出して、19 尋ねた。「この者はあな

たがたの息子で、生まれつき目が見えなかったと言うのか。それが、どうして今は目が見えるのか。」
20 両親は答えて言った。「これが私どもの息子で、生まれつき目が見えなかったことは知っています。
21 しかし、どうして今、見えるようになったのかは、分かりません。誰が目を開けてくれたのかも、私
どもは分かりません。本人にお聞きください。もう大人ですから、自分のことは自分で話すでしょう。」
22 両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちを恐れていたからである。ユダヤ人たちはすでに、イエスをメ
シアであると告白する者がいれば、会堂から追放すると決めていたのである。23 両親が、「もう大人で
すから、本人にお聞きください」と言ったのは、そのためである。

(聖書協会共同訳)

おはようございます。学期も三分の一ほど終わりましたが、いかがお過ごしでしょうか。秋も深まりつ
つある仙台ですが、夏が猛暑で、気温差が激しいので、体調には注意してください。

今日の『聖書』箇所は、生まれつき目の見えない人がイエスによって癒やされた後、どうなったかのお
話です。イエスが泥に唾を吐き、「白アムの池」に行って洗いなさいと言われ、その言葉通りに行動した
人が、結果、目が見えるようになった出来事です。

当時、このような状態では、おそらく仕事ができなかったので、物乞いをしていたと思いますが、そ
の人が完全に癒やされた出来事です。皆さんだったら、この人を通学・通勤途中に見ていたかかもしれませ
ん。癒された人を見たら、どう思うでしょうか。さらにその癒しが、「先生」と呼ばれているイエスによっ

てだったらもつと驚くのではないでしょうか。なので、どのようにして癒やされたかを聞いて驚き、ファリサイ派の人たちのところに連れて行ったとあります。

一五節では、人々と同じ質問をファリサイ派の人たちも繰り返しています。つまり、どうして見えるようになったのかと尋ねました。やはり同じ答えで、「あの方（イエス）が私の目にこねた土を塗りました。そして、私が洗うと、見えるようになったのです」と述べていますが、それでも、信じなかったと一八節にあります。

見えるようになった人の意見を聞いているが聞いても信じられない人々。本人自身の証だけでは不十分で、両親にも尋ねていますが、なぜなのでしょう。背景には、イエスに対する不信感が垣間見られます。一四節には、イエスが癒やされたのが安息日で、ユダヤ教徒の人々が働いてはいけない日に癒したからと説明がありますが、神の掟を守られない人は、罪人だと決めつけています。いいことをしているにもかかわらず、です。つまり、神の掟を破る人には良いことはできない。たとえそれが、困っている人を助けることであつたとしてもということになります。

皆さんだつたら、どう思いますか。神は安息日を祝福され、聖別され、休まれたと「創世記」にはあります。「出エジプト記」の二〇章八節以降には、「安息日を覚えて、これを聖別しなさい。六日間は働いて、あなたのすべての仕事をしなさい。しかし、七日目はあなたの神、主の安息日であるから、どのような仕事もしてはならない」とあります。だから、安息日に何かをすること⇨仕事をする事となり、良くないと考えたのでしょうか。それでは、本当に神は、良いことをしてはならないと考えたのでしょうか。神は安息日のための神ではなく、安息日をも創られた神です。神の本質が愛であることは、イエス・キリストが

罪を犯し続ける人間のために、十字架上で罪を贖うために死なれたことから明らかです。そのような神が、生まれた時から外を見たことがない人を見かけた時に、放置することを良いと思うでしょうか。それとも、イエスがされたように、立ち止まって助けるでしょうか。良い神、愛である神ならば、イエスと同じ行動を取ったでしょう。イエスは神の御子です。

この出来事から私たちが学べることは、こうしてはならない、これをするのは間違っているという様々な暗黙の掟やルールが社会には存在しますが、立ち止まって、それらはなぜできたのかを確認することが必要でしょう。当初は、良い目的、良い意図で作られたものだったかもしれないかもしれません。しかしそれが、守ることを守るために単に伝統的に行われている場合、本当は改革をしたり、助け合ったりすれば大変助かるのに、しない場合：社会は停滞し、人間関係は硬直し、そこには愛も喜びもなくなりません。私たちが日々、直面するストレスの多くは、こういう無言のルールや掟に縛られ、より良い変革を起こせないときに生まれるのではないのでしょうか。伝統も大切ですし、神の掟も大切ですが、時にはより大切なことのために、愛を持って行動すべき時もあるかもしれません。自分や他者のためにできるより良い行動。それをイエスは示してくれたと考えられるのではないのでしょうか。

(十月二十七日 大学)



「嬉しいな」「アーメン」「ありがとう」

幼稚園 園長 島 内 久美子

テサロニケの信徒への手紙一 五章一六〜一八節

16 いつも喜んでいなさい。

17 絶えず祈りなさい。

18 どんなことにも感謝しなさい。

これこそ、キリスト・イエスにおいて

神があなたがたに望んでおられることです。

(聖書協会共同訳)

今日は感謝祭礼拝です。神さまからいただいたお恵みに感謝のお祈りをする礼拝です。

(目の前に飾っている野菜、果物、落ち葉を見ながら)

ミカンはすきですか？そうですね、甘くておいしいものね。大根は好きですか？苦手なお友だちもいますね。でも冬に体を強くしてくれる大切な食べ物です。庭の大きな木から落ちてきた黄色や赤の落ち葉、きれいだね。でもこの葉っぱは夏にはまだ緑色で木にくっついていて、暑かった夏に木陰を作ってくれて、風を呼んでみんなを涼しくしてくれました。私達のまわりには神さまからのプレゼントが一〇〇個も一〇〇〇個も、もっともつとあふれています。

あかるい太陽、大切な水となる雨、きれいな花やかわいい虫たち。それから毎日ご飯を食べられること、寒い夜に温かいお家があること、優しい気持ちになるお家に生まれてきたこと、自分で歩いたり、走ったりできる元気な体、「おはよう」と言えるお友だちがいること、もっともつとありますね。

今月の神さまからのみ言葉は

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」です。

この御言葉を分かりやすく言うと、「嬉しいな」「アーメン」「ありがとう」です。

皆さんはいつも神さまに「嬉しいな」「アーメン」「ありがとう」と言っていますね。でもね、神さまは「いつも」「絶えず」「どんなことにも」と言っています。嬉しい時ばかりではなく、悲しい時も、嫌な気持ちの時もなのです。これは先生も難しいことです。悲しいことなのに「ありがとう」はなかなか言えません。もしも「こんなプレゼントなんかいらな」と思うようなことがあった時には思い出してください。

「いつも」イエス様が側にいてくださること、「絶えず」イエス様が「大丈夫だよ」と勇気づけてくださること、「どんなことにも」神さまの愛が溢れていることを。

神さまはいつも願っています。私たちの「嬉しいな」「アーメン」「ありがとう」を。

感謝祭の今日、神さまに「嬉しいな」「アーメン」「ありがとう」をお話しましょうね。

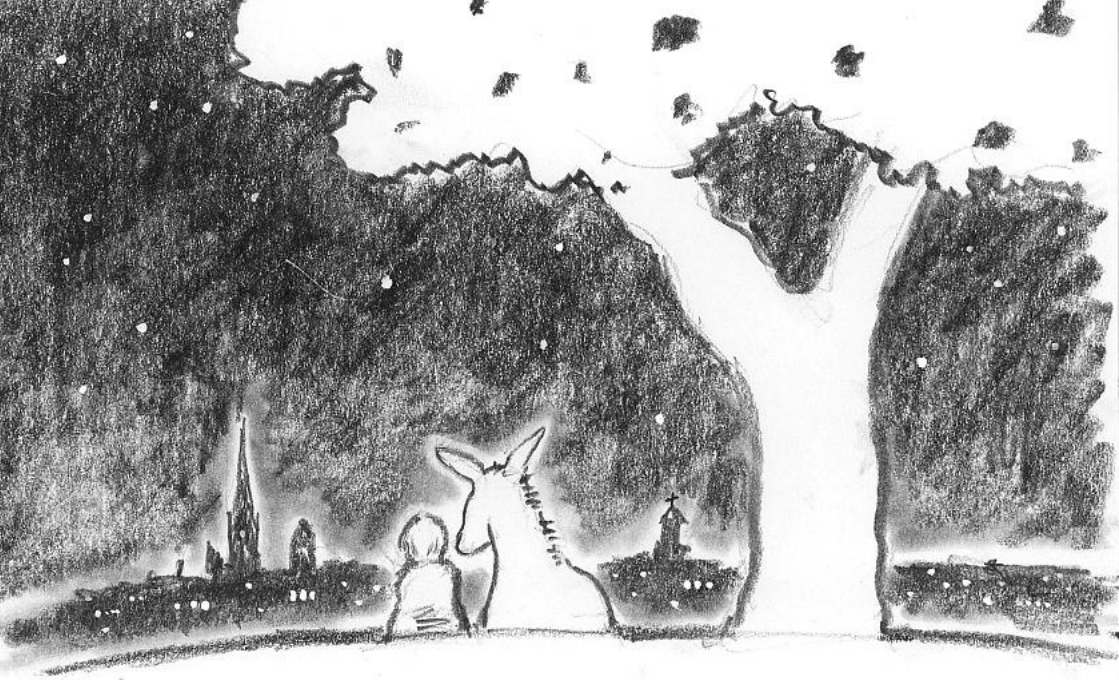
《お祈り》

天のやさしい神さま、いつも私たちにたくさんのお恵みをくださりありがとうございます。

これからも神さまに嬉しい気持ち、ありがとうの気持ちをたくさんお話していきますので、どうかお聞きください。これからも神さまと一緒に歩いていけるようにお導き下さい。

このお祈りを、イエス様のお名前をとおしてみ前におささげいたします。アーメン

(十一月十四日 幼稚園感謝祭礼拝)



闇の中を歩んでいた民は大なる光を見た。
死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が輝いた。

(イザヤ書 9章1節)



生ける石として、社会に生きる

大学宗教授主任 椎名 雄一郎

ペトロの手紙一 二章一〜一〇節

1だから、一切の悪意、一切の偽り、偽善、妬み、一切の悪口を捨て去って、2生まれたばかりの乳飲み子のように、理に適った、混じりけのない乳を慕い求めなさい。これによって成長し、救われるようになるためです。3あなたがたは、主が恵み深い方だということを味わったはずです。4主のもとに来なさい。主は、人々からは捨てられました。神によって選ばれた、尊い、生ける石です。5あなたが自身も生ける石として、霊の家に造り上げられるようにしなさい。聖なる祭司となつて、神に喜んで受け入れられる霊のいけにえを、イエス・キリストを通して献げるためです。6聖書にこう書いてあるからです。

「見よ、私は選ばれた尊い隅の親石を

シオンに置く。

これを信じる者は、決して恥を受けることはない。」

7 それゆえ、この石は、信じているあなたがたには掛けがえのないものですが、信じない者にとっては、「家を建てる者の捨てた石」

これが隅の親石となった」

のであり、8 また、

「つまずきの石」

妨げの岩」

なのです。彼らがつまずくのは、御言葉に従わないからであって、そうなるように定められていたのです。9 しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それは、あなたがたを闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある顕現を、あなたがたが広く伝えるためです。10 あなたがたは、

「かつては神の民ではなかったが

今は神の民であり

憐れみを受けなかったが

今は憐れみを受けている」

のです。

(聖書協会共同訳)

皆さんの多くは、大学を卒業した後、社会の中で働くことを考えているのではないのでしょうか。けれども、「何のために働くのか」とあらためて考えてみると、その答えは実は簡単には出せない問いであり、また人によって実にさまざまです。私は、就職活動を控えた三年生の学生たちに向けて行っている「キリスト教学」の授業の中で、次のような問いを投げかけ、グループで話し合ってもらっています。「皆さんは、何のために働きますか。自分のためでしょうか。家族のためでしょうか。それとも社会のためでしょうか。」

すると多くの学生は、結局は「自分のためではないか」と答えることが多いようです。その理由としては、自身の生活を成り立たせるため、お金を得るため、自己実現のため、あるいは人から認められたいという思いなど、さまざまな点が挙げられます。これらは決して否定されるべきものではありません。しかし私は、もう一つの視点、すなわち「社会の側から見た働く意味」についても考えてみるように促します。

私たちの社会にとって、皆さんが「働く」ということは、どのような意味をもつのでしょうか。私たちは社会の一員であり、私たちが働くということは、社会を動かす一つの「歯車」として加えられることだと言うこともできるかもしれません。「歯車」と聞くと、まるで人間が機械の部品のように扱われているかのようで、「私たちは一人ひとり人格をもった人間だ」と反論したくなるかもしれません。しかし現実には、社会は多くの人々の働きが歯車のようにかみ合うことで動いています。誰か一人ですべてを成し遂げることは、ほとんど不可能です。そして、どんなに小さな歯車であっても、それが欠けてしまえば、全体はうまく回らなくなってしまうのです。

本日読んだ聖書の言葉にも、これとよく似たことが語られています。ペトロの手紙一 二章五節には、「あなたがた自身も生ける石として、霊の家に造り上げられるようにしなさい」と記されています。当時の家は、石を一つひとつ積み上げて造られていました。ペトロは、私たち一人ひとりが命ある「生ける石」であり、その石が積み上げられることによって、神の霊の家が形づくられていくのだと語っています。

私たちの社会も、これと同じではないでしょうか。たとえば、皆さんが今在籍している東北学院大学もそうです。今日、皆さんが大学に来てからここに座るまでの間にも、警備員の方、清掃を担う方、事務職員、教員、そして学生同士など、実に多くの人々と出会ってきたはずです。それぞれの役割は異なりますが、各々が自分の役割を果たすことで、この大学という一つの「家」は成り立っています。どれか一つでも欠けてしまえば、この大学は大学としての働きを果たすことができません。皆さん一人ひとりが、まさにこの大学を支える「生ける石」なのです。

聖書はさらに、「見よ、私は選ばれた尊い隅の親石をシオンに置く」と語ります。「親石」とは、建物の土台となる要の石のことです。見た目に特別立派な石であるとは限りませんが、その石がなければ、建物全体は成り立ちません。聖書は、この親石こそが神ご自身、すなわちキリストであると示しています。信じる者にとって、この石はかけがえのない存在ですが、信じない者にとっては、ただの石、あるいは捨てられた石にしか見えないのです。

私たちはつい、目に見える成功や評価、華やかさに心を奪われがちです。しかし、本当に大切な「要石」は、目立たないところで静かに私たちを支えています。その土台の上こそ、私たちは安心して生き、働き、成長していくことができるのです。

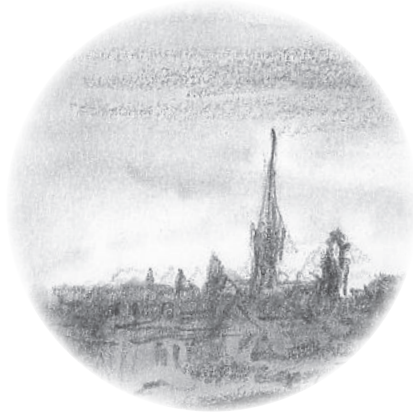
どうか皆さんも、日々の歩みの中で神を信頼し、「生ける石」として、それぞれの場所で与えられた役割を大切にしてください。そして、キリストという「親石」に支えられながら、互いに助け合い、支え合う共同体を築いていく者でありたいと願います。

《祈り》

天の父なる神さま、あなたは私たちを、生ける石として創造してくださいました。しかし私たちは時に、自分の目的を見失い、親石であるあなたの存在を忘れてしまいます。それでもあなたは、変わることなく私たちを見守り、土台として、親石として支え続けてくださっています。感謝いたします。

どうか私たち一人ひとりが、この世界の中で「生ける石」として歩んでいくことができますように。何をしてよいかわからず迷っている者がいるなら、その歩むべき道をお示しくください。この感謝と願いを、主イエス・キリストのみ名によってお祈りいたします。アーメン。

(十一月十四日 大学)



初めに言があった。言は神と共にあった。

言は神であった。

この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。

言によらずに成ったものは何一つなかった。

言の内に成ったものは、命であった。

この命は人の光であった。

(ヨハネによる福音書 1章1－4節)



平和の種

大学宗教学主任 田島卓

ゼカリヤ書 八章一二節

12 平和の種が蒔かれ

ぶどうの木は実を結び

地は実りをもたらし

天は露を降らせる。

私はこの民の残りの者に

これらすべてのものを受け継がせる。

(聖書協会共同訳)

秋もだいぶ深まり、朝晩の冷え込みも厳しくなってきました。ガソリンスタンドや自動車用品店でタイヤ交換の作業をしているのを見ると、もう少しで本格的に冬がやってくることをひしひしと感じます。今日お読みした聖書の箇所は、あたかも秋の恵みに感謝するかのような言葉が並んでいました。秋の実りといえば、みなさんはこの秋、芋煮会をしたでしょうか。秋になると、西友で貸し出している鍋を持ちだして、広瀬川で芋煮会をしている学生の姿をよく見かけるわけですが、今年は、例年よりも少なかったように思います。

その理由はいくつかありそうですが、ひとつには、クマの出没が考えられます。今年は例年になく全国的にクマ出没が多く、人的被害も出ていますが、このキャンパスの近くでも、十月十七日に、霊屋下でクマの目撃情報がありました。クマは川沿いに下ってくるので、たしかに広瀬川で芋煮会をするのはそれほど賢い選択ではないように思います。

クマがなぜこれほど増えてしまったのかと思えば、おそらく指摘できるのは温暖化の影響です。温暖化によって山林の植物の生育状況が変わり、またそれを食べる草食動物の生育状況が変わったことが考えられます。このあたりに出没するようなツキノワグマは、普段なら食べる食物の九〇％は植物なのだそうですが、草食動物の数の変化に対応するような形で、山林のなかではもはや餌を調達できなくなってしまってきている状況が考えられます。

してみると、この辺りにもクマが出没するという直接的な不安は、気候変動によってわたしたちの未来が脅かされているという間接的ながらも確実に迫っている不安と結びついています。しかも、そのときに、私たちには、もう一つの不安がまとわりついてはいないでしょうか。つまり、そうした気候変動のような

あまりに大きな問題に対して、私たちができることはない、という無力感に満ちた不安です。

これはまた、もしかすると、物価高や円安という経済の先行きのみえなさによって私たちがうつすらと感じている不安とも共鳴します。一〇代後半から二〇代前半という年代は、自分の人生はなんでも思い通りに自由になるという全能感と傍若無人さがある一方で、人生の中でも漠然とした不安を感じやすい年代ではありますが、とくに最近の学生さんだと、この年代の不安感に加えて、これまでの自分たちが享受してきた生活や社会が失われるかもしれないことへの不安が大きいのではないのでしょうか。

もし、私たちが不安を抱え続けて生きるのなら、ということが起こるのでしょうか。不安を抱え続けることは、大きなストレスになります。個人のレベルでは、そのうちに健康を損なってしまふでしょう。一方、集団が不安を抱え続けると、社会は次第に不安定になっていきます。そうして、不安を解消しようとして、人よりも多くのものを獲得しようとし、人からものを奪われないようにと防衛しようとしはじめます。何かを守ろうという防衛反応が過剰に働き始めます。その延長線上に、争いがあり、あるいは戦争という災禍が待っていることは、不安の時代の中で誰もが漠然と考えてしまっていることではないのでしょうか。

だから、不安な時代のなかで、何か安心できるもの、安心できる場所を見つけることは、とても大切なことです。きつとそれが不安に打ち勝つための小さな種になるからです。どこで、そういった安心できる場所を探すことができるでしょうか。

ところで、皆さんは、キリスト教の歴史の授業を受けていると思いますが、日本のキリスト教の歴史の中に、あまり有名ではありませんが、鈴木義男という人がいます。この東北学院の卒業生で、東北学院の

理事長を務めていたこともあります。数年前、この鈴木義男という人のことが注目されたことがあります。というのは、この鈴木義男が、日本国憲法第九条に、「平和」という言葉を入れた人間であったことがわかったからです。少し誇張して言えば、鈴木義男がいなければ、日本国憲法は「平和憲法」と呼ばれることはなかったかもしれないのです。

鈴木義男は、世界大戦前の不安の時代に生きていながら、社会の不合理と闘い、社会の中で弱い立場に置かれた人たちの弁護を行なったことが知られています。不安な時代の中で、あえて声を上げて活動することは、自分の人生を危うくするものです。しかし、鈴木義男は不安な時代にあっても、正義と平和を追求した人でした。いわば、平和の種を蒔いた人でした。なぜそのようなことが可能だったのでしょうか。

ありきたりな推測ですが、鈴木にとっては、キリスト教の精神こそが、安心を与えるものだったのでないかと思えます。今日読んだゼカリヤ書の箇所の前後を読むと、この時代にもさまざま不安があったことは読み取れます。しかしその中で、今日お読みした神の約束があります。もう一度聖書の箇所を読んでもみましょう。「平和の種が蒔かれ／ぶどうの木は実を結び／地は実りをもたらし／天は露を降らせる／私はこの民の残りの者に／これらすべてのものを受け継がせる」

私たちはこの世のなかのことに囚われるなら、不安から逃れることはできません。しかし、この世のなかだけでない世界、神が約束する世界があることを信じるときに、この世の中のことを相対化することができます。そのときに初めて、この世の不安が絶対的なものではないことに気づけます。逆説的かもしれないませんが、この世を絶対化しないことで、不安に立ち向かい、この世界を生きていくための安心を得ることができます。

みなさんが、不安に負けるのではなく、平和の種を蒔く人となることを、そして、五〇年後、一〇〇年後の世界の平和の種を蒔いたのはみなさんだったと言われるように、お祈りしたいと思います。

《祈り》

ご在天の父よ、この朝も礼拝を捧げることのできる幸いを深く感謝いたします。私たちが不安に襲われるとき、この不安を解消するために自分の身を守ろうとするのではなく、かえって、ともに不安を抱える人たちとの間に平和の種を育てることができるようになってください。

この学校に集められた学生お一人お一人の、健康と学びを豊かに恵み、守ってください。

この拙き祈りを尊き救い主イエス・キリストの御名によって、み前にお捧げいたします。アーメン。

(十一月十七日 大学)



そこでイエスがお尋ねになった。

「それでは、あなたがたは私を何者だと言うのか。」

ペトロが答えた。「あなたは、メシアです。」

(マルコによる福音書 8章29節)



いちばんはじめのクリスマス

二〇二五年度 公開東北学院クリスマス礼拝説教

日本基督教団 本郷中央教会牧師 米山結実

ルカによる福音書 二章八〜二〇節

8 さて、その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。9 すると、主の天使が現れ、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。10 天使は言った。「恐れるな。私は、すべての民に与えられる大きな喜びを告げる。11 今日ダビデの町に、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。12 あなたがたは、産着にくるまって飼い葉桶に寝ている乳飲み子を見つけた。これがあなたがたへのしるしである。」13 すると、突然、天の大軍が現れ、この天使と共に神を賛美して言った。

14 「いと高き所には栄光、神にあれ

地には平和、御心に適う人にあれ。」

15 天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行つて、主が知らせてくださっ

たその出来事を見ようではないか」と話し合った。16そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼葉桶に寝ている乳飲み子を探し当てた。17その光景を見て、羊飼たちは、この幼子について天使から告げられたことを人々に知らせた。18聞いた者は皆、羊飼たちの話を不思議に思った。19しかし、マリアはこれらのことをすべて心に留めて、思い巡らしていた。20羊飼たちは、見聞きしたことがすべて天使の告げたとおりだったので、神を崇め、賛美しながら帰って行った。

(聖書協会共同訳)

私は約二〇年前に東北学院大学のキリスト教学科を卒業いたしました。米山結実と申します。学生の頃、この礼拝堂の講壇に立ってお話する人は偉い人だと思っていましたので、少し緊張もしています。しかしこうして、母校の礼拝堂で牧師として招いていただき、とても嬉しく神様に感謝しています。私は東北学院大学に通っていた頃、福島市の実家から電車で通学していました。一、二年は泉キャンパス、三、四年は土樋キャンパスでしたが、仙台の街並みも、仙台駅から学校までの道もいろんな風景が懐かしく、そして変わっていることに驚きながら今日ここへまいりました。思い返すと素晴らしい先生方や友人との出会いもあり、とても楽しい四年間でした。私が東北学院大学を卒業して二年後に父が亡くなった時にも、恩師は手を差し伸べてくださり心から感謝しています。

現在は東京に住んでいます。本郷中央教会という、東京大学の裏門に位置する教会の牧師をしています。そして平日は教会付属の幼稚園で副園長として園児と関わり、鼻を拭いてあげたり一緒に遊んだりしています。

にはおむつ替えをしたりもしています。その他にも、青山学院中等部で聖書科の授業を受け持ち、一昨日は二学期の成績をつけてきました。私生活では小学生三姉妹の母でもありまして、今年度は卒業対策委員長も務めています。一日一ヶ月が飛ぶように過ぎていきます。明日も幼稚園のページェントというクリスマス礼拝の劇中でピアノ伴奏をします。そんなこんなで常にスケジュールが絡み合い、また家でも職場でもあらゆる種類の賑やかさというか騒がしさに思考が分断される事が当たり前です。そんな生活をしていきますと、時々、今日は何日で何曜日だっけとわからなくなる時もありますので、今、お約束通りここに立つ事ができて、ほっとしてもいます。

最初にお声をかけていただいた時、正直自信がありませんでした。でもそんな今の私だからこそ、神様が母校に遣わしてくださったのだと思うのです。

今週はキリスト教のカレンダーではアドベントと申しまして、イエス様のお誕生を心を静めて待つ期間です。しかし私たちは、今日の聖書に出てくる羊飼いたちのように、目の前のことに忙しく、心が騒がしくなりがちです。

先ほど読んでいただいたのはルカ二章ですが、その前と他の福音書に書かれている御言葉も簡単にご紹介させていただきたいと思えます。御子イエス様のお母さん、マリアさんは、中学生くらいの年齢で、天使からのお告げによってイエス様のお母さんとなりました。不安だったマリアは親類のエリサベトさんを訪ね、励ましと祈りを受けて、天使のお告げと自分の身に起こった出来事を心から感謝し賛美します。そしていよいよ出産が近づいてきたのですが、国から住民登録の命令が出て、夫のヨセフさんの故郷に行か

なければならなくなりました。一〇〇キロもの道のりを旅した後に、ヨセフさんの故郷、ベツレヘムというところに着きました。しかし、またはや試練が舞い込みます。どこの宿屋も旅人で満員で、ヨセフとマリアに案内されたのは家畜小屋でした。そこでマリアは出産します。赤ちゃんイエス様はベッドではなく飼葉桶に寝かされます。私なら心が折れそうな状況で、クタクタになっているマリアの元に初めて訪問してきたのが、今日の御言葉に出てくる羊飼いたちなのです。

羊飼いは、当時のユダヤでは羊の持ち主たちに雇われていました。その仕事は二四時間労働で、さらに、羊が野獣に襲われたり、泥棒に奪われると羊の持ち主に賠償金を払わなければならず、危険なのに割に合わない大変なものでした。ですから羊飼いはいつも羊と一緒に過ごし、貧しい暮らしをしていたのです。休日もろくにありませんから、律法という決まりを守る生活をすることもできませんでした。律法には安息日は礼拝をしましょうという決まりがありました。ですから町の人々はお仕事を休み、礼拝を献げます。しかし羊飼いはそこに加わることができません。そうすると、周りの人から神様の教えを守らないはみ出しもの、罪人だと思われてしまうのです。貧しい生活と、周りから罪人と見なされて居場所がなかったと言う二重の苦しみを背負った羊飼いたちは、どんなに孤独だったことでしょうか。そんな生活の繰り返しの中で、神様を求める心もいつしか消えてしまって、「神様だつて僕たちのこと忘れてるんじゃないかな。」と死んでしまっても仕方のない厳しい現実の中にいたのです。

そんな羊飼いがいつもの真っ暗な草原で羊と一緒にうとうとしていると、突然真昼のように明るくなり、主の天使が近づいてきました。そして主の栄光が周りを照らします。羊飼いたちは「神様を見たものは死ぬ」と教えられていたことを思い出したのでしょうか。神様の教えに従えない自分たちはきつと裁かれて

滅ぼされてしまう。言いようのない大きな恐れが羊飼いたちを襲いました。でもそれは違いました。恐くて震える羊飼いたちに、天使は言ったのです。

「恐がらなくていい。大きな喜びのニュースです。」「今日ダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。布にくるまって飼葉桶に眠る赤ちゃんがそのしるしです。」あなたがたの、羊飼いたちのためなんだと天使は高らかに宣言するのです。その後さらに天使の大群が加わって大合唱が始まりました。『いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。』地には平和、御心に適う人にあれ、というのは、私たちが神様を喜ばせることができる人になりなさいという意味ではなくて、神様を選んでくださった人には平和が与えられますよという意味です。羊飼いたちはもうすでに神様選ばれ愛されているのですから、平和が訪れるのですよということです。仲間はずれにされ、孤独の中にいる、思い通りにいかない生活の羊飼いたち宛に神様の愛が伝えられたのです。そんな祝福に満ちた大勢の天使の大合唱は、羊飼いたちの心の暗闇に光を差し込んでいきました。神様信じられない心を溶かしていきました。そして神様を信じるものとして変えられていったのです。羊飼いたちは神様からの自分たちへの愛のメッセージ、救いの喜びを受け止めたのです。

天使が離れ元の静かな闇が広がると羊飼いたちは我に返りました。そして「さあ、ベツレヘムに行こう！神様が知らせてくださったその出来事を見てこよう」と言って話し合い、羊と一緒にベツレヘムの街へと急ぎます。

にわかに、マリアたちの家畜小屋のあたりが騒がしくなり大勢の人たちの声が聞こえてきました。何事

かと思つたでしょう。しばらくすると、羊飼いたちがとっても嬉しそうに入ってきたのです。

ヨセフが「一体何事ですか」と尋ねると羊飼いたちは口々に語ります。あたりが明るくなり、天使が現れ知らせを聞いたこと、天使の大合唱のこと：飼葉桶で眠る赤ちゃんを探し回ったこと。

羊飼いはイエス様のお誕生を心から喜び、救い主と信じて拝み、賛美しました。これがいちばん初めのクリスマス、イエス様への最初の礼拝です。そして、この出来事を羊飼いは周りの人たちにも知らせにいきます。羊と一緒にいろんな場所を渡り歩く羊飼いが、みんなにイエス様のお誕生を告げ知らせます。世界で最初の伝道も羊飼いが行ったのです。

マリアは神様のなさった不思議な出来事に驚かされたことでしょう。マリアにとっては馴染みのないベツレヘムに来て、宿もなく家畜小屋の中での出産。不安でたまらなかつたと思います。ヨセフもいてくれたけれど、孤独も感じたかもしれません。しかし、そこに神様が確かに働いて共にいてくださった。『地には平和。御心に適う人にあれ。』神様が選んでくださった人には必ず平和が、祝福が与えられると改めて受け止められたのではないのでしょうか。そして喜び祝ってくれる羊飼いたちの姿からも、これからのイエス様との生活も神様の愛と平和は与えられ続ける、きっと大丈夫と励まされたのではないのでしょうか。

マリアや羊飼いの人生は苦勞の尽きないものですが、私たちに与えられる神様の御心も計り知れないものです。二〇二五年ももうすぐ終わりますが皆さまにとって今年はどのような年だったのでしょうか。出会いや別れ、健康問題やご家庭やお仕事でも、いろいろなことがあったと思います。嬉しいことも、理不尽に思えることもあったと思います。時には、希望が見出せず、押しつぶされそうな日々を過ごした方もいらつしやるかもしれません。しかし、なんでこうなるんだろう、私ついてないと思える時にも、神様は

私たちの想像を超えた方法で、神様に立ち返らせてくださり、私たちに愛と祝福を示してください。なぜなら、私たちが愛するが故に、この世界のすべてのものと私たちを創造された神様だからです。そのお方が、罪の赦しとして、二〇〇〇年以上前にイエス様をお遣わしになったのが、クリスマスの出来事です。これを今私たちが聖書を通して知ることができていることが、何よりも神様が私たちが愛して下さっている事のしるしなのです。

孤独だったり忙しすぎたり、関係ないと思っている私たちにこそ、神様はクリスマスの喜びを告げてくださいます。告げられた私たちは、今度は羊飼いたちのように出かけて行って伝えるものでありたいと思います。御言葉を受け、礼拝をして恵まれたからこそ、周りの人への愛、優しさ、理解を示したり、赦す事ができるのではないのでしょうか。私たちがそうありたいと願うならば、そのために必ず神様は、時間と健康な体や睡眠や協力者を与えて日用の糧を与えてくださいます。私自身、今日の東北学院大学での説教者としてのお導きも、福音を知ったものとして神様が与えてくださったお働きなのです。

私たちは、礼拝を終えたとまた元の生活に戻っていきます。現実の生活の中で喜びもあれば、試練に思えることもあるでしょう。そうすると罪深い私たちは、今日の御言葉や礼拝の恵みを忘れてしまい、不満を言うかもしれません。

ですが神様は、私たちが顔を背けてしまう時も、また私たちの想いを超えた方法で愛を示し、導いてくださるのです。クリスマスの恵みを与え続けてくださるお方なのです。

これからも、私たちの闇を裂くように天使の大神群の喜びの知らせは届くのです。「恐れるな、あなたが迷いや苦しみの只中であつたとしても大いなる喜びを告げる。あなたのために救い主がお生まれになった

のです」と。私たちが神様に顔向けできない、神様のことなんて気にしてる暇なんて無いと思う時だって、そんな時こそ、天使のお告げ「地には平和、御心に適う人にあれ」という御言葉を心に留め、力与えられるものでありたいと願います。

私たちが礼拝をささげているイエス様は、布にくるまって飼い葉桶に眠る小さな赤ちゃんとしてお生まれになりました。その後、私たちの罪を赦すために身代わりとなって十字架で死なれ、再び布にくるまって墓に収められることになるお方です。しかし死に勝利されて復活し、私たちを永遠の命へと導いてくださる救い主なのです。

羊飼いを通して与えられたクリスマスの出来事に感謝してまいりましょう。そしてこれからもいつまでも神様の愛のうちにある私たちが、神様のご計画にお応えできますように、お祈りいたします。

(十二月十二日 公開東北学院クリスマス)



後期音楽礼拝

教養教育センター教授・大学オルガニスト 今井 奈緒子

マタイによる福音書 二章一―一二節

1 イエスがヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、東方の博士たちがエルサレムにやって来て、2 言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私たちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」3 これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。4 王は祭司長たちや民の律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。5 彼らは王に言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

6 『ユダの地、ベツレヘムよ

あなたはユダの指導者たちの中で

決して最も小さな者ではない。

あなたから一人の指導者が現れ

私の民イスラエルの牧者となるからである。』

7そこで、ヘロデは博士たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。8そして、こう言つてベツレヘムへ送り出した。「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。私も行って拝むから。」9彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立つて進み、ついに幼子がいる場所の上に止まった。10博士たちはその星を見て喜びに溢れた。11家に入つてみると、幼子が母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。

マタイによる福音書 二五章一―一三節

1「そこで、天の国は、十人のおとめがそれぞれ灯を持って、花婿を迎えに出て行くのに似ている。2そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった。3愚かなおとめたちは、灯は持っていたが、油の用意をしていなかった。4賢いおとめたちは、それぞれの灯と一緒に、壺に油を入れて持っていた。5ところが、花婿の来るのが遅れたので、皆うとうとして眠ってしまった。6真夜中に『そら、花婿だ。迎えに出よ』と叫ぶ声があった。7そこで、おとめたちは皆起きて、それぞれの灯を整えた。8愚かなおとめたちは、賢いおとめたちに言った。『油を分けてください。私たちの灯は消えそうです。』9賢いおとめたちは答えた。『分けてあげるにはとても足りません。それより、店に行つて、自分の分を買つて来なさい。』

10 愚かなおとめたちが買いに行っている間に、花婿が着いた。用意のできている五人は、花婿と一緒に祝宴の間に入り、戸が閉められた。11その後で、ほかのおとめたちも来て、『ご主人様、ご主人様、開けてください』と言った。12しかし主人は、『よく言っておく。私はお前たちを知らない』と答えた。13だから、目を覚ましていなさい。あなたがたはその日、その時を知らないのだから。」

(聖書協会共同訳)

音楽礼拝

☆プログラム

前奏

D.J. スウェーリンク リート変奏曲「あかつきの空の美しい星よ」

Dirck Janszoon Sweelinck (一五九一—一六五二)

Liedvariationen “Wie schön leuchtet der Morgenstern”

讚美歌

※グロツケンの前奏に続いて 二一—二七六番(一節、三節)

聖書

マタイによる福音書 二章一—一節(新約聖書二ページ)

マタイによる福音書 二五章一—一三節(新約聖書四九ページ)

演奏

J.S. バッハ コラール編曲「起きよ、と呼ぶ声聞こえ」BWV645

司会 総合人文学科長 吉田 新
奏楽 大学オルガニスト 今井奈緒子

Johann Sebastian Bach (1685—1750)

Choralbearbeitung “Wachet auf ruft uns die Stimme” BWV645

讚美歌 二—二三〇番 (一〜三節)

黙 禱

後 奏 J. S. バッハ コラール編曲「起きよ、と呼ぶ声聞こえ」 BWV140-7

Johann Sebastian Bach (1685—1750)

Choralbearbeitung “Wachet auf ruft uns die Stimme” BWV140-7

☆ 曲目解説

アドヴェントの第三週を迎え、来週はいよいよクリスマスがやって来ます。今日は、ドイツの神学者
フリリップ・ニコライ（一五五六一—一六〇八）が作詞・作曲をした、アドヴェントと公現日にちなむコ
ラール（宗教改革後によって生まれたドイツ語の賛美歌）を歌い、その編曲によるオルガン作品を聞く音
楽礼拝です。

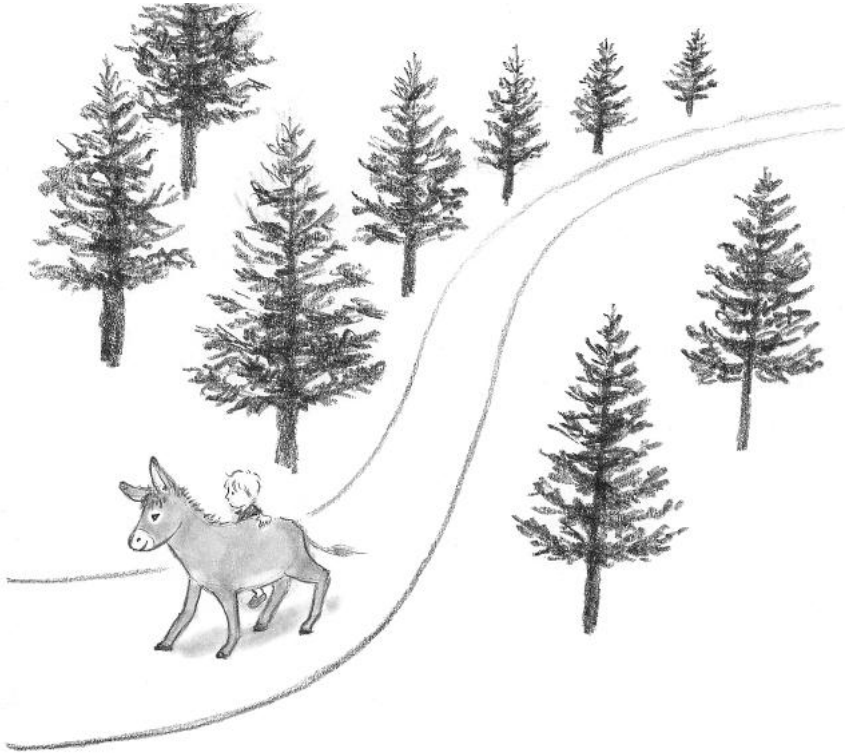
ニコライが牧師をしていたウンナという町をペストが襲い、わずか半年の間に一、五〇〇人が命を落と
しました。多いときには一日に三〇人を教会の墓地に埋葬しなければならぬ悲惨な状況の中で、ニコラ
イはこの二曲のコラールを作り、死の恐怖におびえる信徒たちを励ましたと伝えられています。「あかつ
きの空の美しい星よ」と「起きよ、と呼ぶ声聞こえ」は後にそれぞれコラールの女王、コラールの王と呼
ばれるほどに親しまれてきました。

コラールのテキストとなった聖書の箇所を朗読していただきます。

前奏は「あかつきの空の」によるオランダの巨匠J・スウェーリンクの息子、ディルク・スウェーリンクの編曲です。「起きよ」はいずれもバッハの作品。礼拝の中で演奏するのは《シュプラー・コラール》集（※シュプラーは出版者の名前）の第一曲として有名なオルガン曲です。原曲は教会カンタータ一四〇番第四曲で、弦楽器と通奏低音の伴奏でテノールがコラールを朗々と歌いますが、これをバッハ自ら、オルガンでひとりで弾けるように編曲しました。後奏は同じカンタータ第七曲の編曲で、原曲では器楽の伴奏を伴い四声体で歌われます。

（十二月十五日 大学）

※「あかつきの空の」の前奏として、ドイツの教会で鳴るグロッケン（オランダではカリヨンと呼ぶ）の録音を流していただきます。土樋、五橋両キャンパスで、礼拝の開始時刻である一〇：二〇に構内に流れているのも、カリヨンの演奏です。青空に抜けるような爽やかな音色に耳を傾けてみてください。



ダビデの詩。

主はわたしの光、わたしの救い

わたしは誰を恐れよう。

主はわたしの命の砦

わたしは誰の前におののくことがあろう。(新共同訳)

(詩編 27編 1節)



光は闇の中で輝いている

高等教育開発室副室長・講師 齋藤 渉

ヨハネによる福音書 一章一〜一八節

1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。2 この言は、初めに神と共にあった。
3 4 万物は言によって成った。言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に成ったものは、命であった。この命は人の光であった。5 光は闇の中で輝いている。闇は光に勝たなかった。
6 一人の人が現れた。神から遣わされた者で、名をヨハネと言った。7 この人は証しのために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じる者となるためである。8 彼は光ではなく、光について証しをするために来た。
9 まことの光があった。その光は世に来て、すべての人を照らすのである。10 言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。11 言は自分のところへ来たが、民は言を受け入れなかった。12 しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には、神の子となる権能を与えた。13 この人々は、血によらず、肉の欲によらず、人の欲にもよらず、神によって生まれたのである。

14言は肉となつて、私たちの間に宿つた。私たちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であつて、恵みと真理とに満ちていた。15ヨハネは、この方について証しをし、大声で言った。「私の後から来られる方は、私にまさっている。私よりも先におられたからである」と私が言ったのは、この方のことである。」16私たちは皆、この方の満ち溢れる豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを与えられた。17律法はモーセを通して与えられ、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。18いまだかつて、神を見た者はいない。父の懐にいる独り子である神、この方が神を示されたのである。

(聖書協会共同訳)

皆さん、おはようございます。アドヴェントのこの時期に、東北学院の皆さんと共に礼拝をささげ、聖書の言葉に耳を傾ける時間をいただけることを、心から嬉しく思います。十二月に入り、街のイルミネーションが美しく灯つていますが、この光を見ると、私たちは「なぜクリスマスを祝うのか」という問いを改めて受け取ります。それは単なる年中行事ではなく、世界の暗闇の中に差し込む小さな光に気づくためでもあります。今日は、クリスマスに示された東北学院のスクールモットーである「LIFE LIGHT LOVE」が、皆さんの歩みとどのようにつながるのかお話ししたいと思います。

ヨハネによる福音書には、「光は闇の中で輝いている」と記されています。この言葉は、クリスマスの核心を示しています。光は暗闇があるからこそ、その意味が際立ちます。イエス・キリストは、整った場所ではなく、静かで目立たない家畜小屋に生まれました。小さな光としてこの世に来られたその出来事は、

弱さのただ中にこそ神の光が輝くということを示しています。

こうした「闇の中に輝く光」というテーマは、私たちの日常とも深くつながっています。大学生活を過ごす中で、皆さんも心に暗闇を感じることもあるかもしれません。将来への不安や学修のプレッシャー、人間関係の悩み、自分の存在への迷い。楽しい瞬間があっても、ふと一人になると重い気持ちになることもあるでしょう。

しかし、アドヴェントはその暗闇を否定するのではなく、そこに差し込む小さな光に気づく季節です。教会ではロウソクを一本ずつ灯していきますが、それは少しずつ光が増えていく歩みの象徴です。急にすべてが変わることは少なくても、小さな気づき、小さな優しさ、小さな努力が、やがて大きな光へとつながっていきます。クリスマスの光が小さな光として始まったように、皆さんの光も小さくて良いのです。

ここで、東北学院が大切に掲げるスクールモットー「LIFE LIGHT LOVE」に目を向けたと思います。

まず、「LIFE（いのち）」とは、有限な生命体としての命と、神が自らの似姿として創造された個人の尊厳を互いに大切にすることを意味します。私たちの命は限りあるものであり、その有限性の中でどのように生きるかが問われています。しかし同時に、私たち一人ひとりには神の似姿として創造され、かけがえのない尊厳が与えられています。大学生活の中で、自分の価値を見失うことがあるかもしれません。他者と比べて落ち込むことや、思うように結果が出ずに自信をなくすことがあるでしょう。しかし、どれほど揺れ動く日があっても、あなたの尊厳が損なわれることは決してありません。クリスマスは、神が人として来られ、私たちの命を尊く見つめてくださる出来事です。「LIFE」というモットーは、皆さんが互いにその

尊厳と命を大切にしようようにと導いています。

次に、LIGHT（ひかり）とは、学問や科学の成果によって新しい時代を切り開くことを意味します。大学で学ぶという行為そのものが、光に向かう歩みです。皆さんがレポートを書き、講義を受け、研究に取り組むことは、小さなように見えても未来を形づくる大切な一歩です。学問は、社会の暗闇を照らす灯りになります。そして科学の成果は、新しい可能性をひらき、時代を前に進めます。クリスマスの光が、暗闇を貫く希望として世界に広がっていったように、皆さんの学びもまた、小さく見えても確かな光として世界を照らします。今日の学びが、誰かの未来を支え、地域の課題を解決し、社会をよりよい方向へ導く力となるかもしれません。

そして LOVE（あい）とは、隣人愛をもって地域や世界に仕えることを意味します。クリスマスの中心にあるのは愛です。神が人としてこの世界に來られたという出来事は、「ともに生きること」を選ばれた愛の表れです。それは大げさな愛ではありません。弱さの中に寄り添い、悲しみの場所に共に立ち、孤独のただ中に光を届ける愛です。東北学院大学は、長い歴史の中で地域に根ざし、多くの学生が地域のために働き、奉仕し、支え合ってきました。隣人を大切にし、地域の課題を自分のこととして考え、必要とされている場所に手を差し伸べる。LOVEは、大きな行動の前に、小さな気づきと小さな一歩から始まります。友人を思いやること、地域の活動に参加すること、自分の学びを社会に生かすこと、そのすべてが LOVE の実践です。

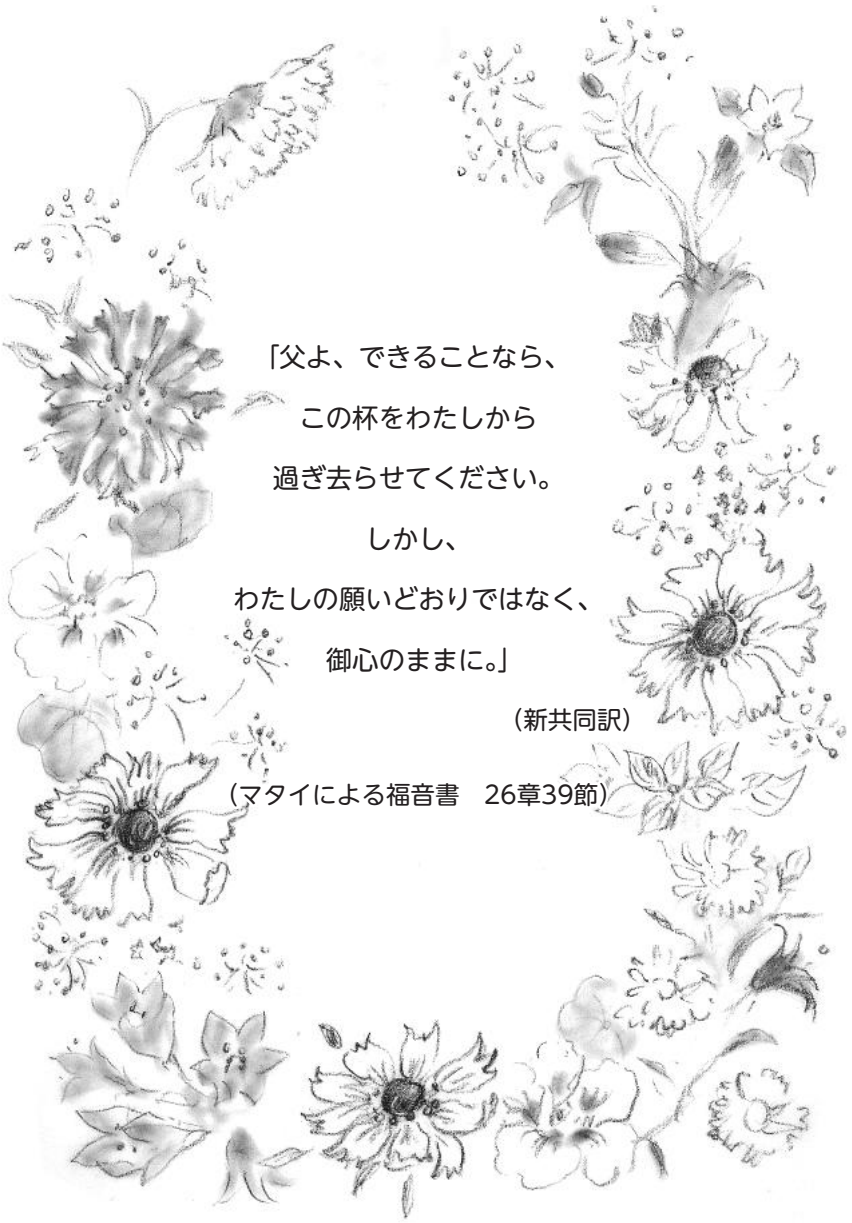
クリスマスは、この LIFE LIGHT LOVE が一つになった出来事です。神が人として來られたことは、命の尊さ、光の希望、愛のぬくもりを示してくださいました。それは東北学院で学ぶ私たちの日常とも深

く関わっているのです。皆さんの学びも人生も、誰かを照らす光になり得ます。そして皆さんが周囲に向ける小さな愛は、「地域へ、世界へ」と動かす力を持っています。

アドヴェントは光を待ち望む季節です。その光は派手ではなく、静かで確かな光です。どれほど暗闇が深く見えたとしても、そこには必ず光が差し込みます。今日の礼拝に來られたこと自体が、その光に向かう大切な一歩です。

皆さん一人ひとりの「I HE」が尊厳を持って守られ、「I GHT」があなた自身と周りを照らし、「LOVE」が地域や世界に温かさを届ける源となりますように。クリスマスの光が、皆さんの心に静かに、そして力強く届きますように。今日の礼拝の時が、その光を受け取るひとときとなり、これからの歩みを照らし続ける光となりますように。

(十二月十八日 大学)



「父よ、できることなら、
この杯をわたしから
過ぎ去らせてください。

しかし、
わたしの願いどおりではなく、
御心のままに。」

(新共同訳)

(マタイによる福音書 26章39節)



一本の木による救済の秘義

二〇二五年度 職員クリスマスマス礼拝説教

大学宗教部長・宗教センター主任 原田浩司

マタイによる福音書 二章九〜一八節

9 彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子がいる場所の上にとまった。10 博士たちはその星を見て喜びに溢れた。11 家に入ってみると、幼子が母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。12 それから、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分の国へ帰って行った。13 博士たちが帰って行くと、主の天使が夢でヨセフに現れて言った。「起きて、幼子とその母を連れて、エジプトへ逃げ、私が告げるまで、そこにいなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている。」14 ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ退き、15 ヘロデが死ぬまでそこにいた。それは、「私は、エジプトから私の子を呼び出した」と、主が預言者を通して言われたことが実現するためであった。

16 さて、ヘロデは博士たちにだまされたと知って、激しく怒った。そして、人を送り、博士たちから確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいる二歳以下の男の子を、一人残らず殺した。17 その時、預言者エレミヤを通して言われたことが実現した。

18 「ラマで声が聞こえた。

激しく泣き、嘆く声か。

ラケルはその子らのゆえに泣き

慰められることを拒んだ。

子らがもういないのだから。」

(聖書協会共同訳)

年末の時期になりますと今年を振り返る特集番組が放送されます。今年一年を振り返りますと、東北学院に連なる皆さんにとって、今年はどうな一年だったでしょうか。こうしてクリスマス季になると各設置校の礼拝堂に（或いは礼拝堂に限らない場所に）クリスマスを象徴するクリスマスツリーがこのように飾られます。皆さんは、なぜこの一本の木がクリスマスのシンボル（象徴）なのか、御存じでしょうか？なぜクリスマスになると世界の各地で一本の木を飾り、デコレーションで飾るのでしょうか。先ほど読みましたマタイによる福音書にも、ルカによる福音書にも、イエス・キリストの誕生にかかわる場面に、実は一本の木はどこにも登場しません。このツリーとはそもそも何なのか、ということを考えられた

ことはあるでしょうか？

インターネットで検索すると、中世ゲルマン民族の間で伝わる「冬至の祭り・ユール祭」に木を飾っていたのが由来で、彼らがキリスト教に改宗する以前からのもので、元々はキリスト教に由来するものではない、といった説明が目立ちます。それは例えば、日本の冬至の習慣として、冬至の日に柚子湯に入るような、日本の民俗的な慣習のようなものかもしれません。ですが、ドイツの著名な新約聖書学者オスカー・クルマンが一九九〇年に『クリスマスの起源およびクリスマスツリーの由来（独原題：Die Entstehung des Weihnachtsfestes und die Herkunft des Weihnachtsbaumes）』という本を発表し、一九九六年には日本語に翻訳・刊行されました（『クリスマスの起源』教文館）。この中で、クルマンは中世ドイツ（当時はフランク王国ないし神聖ローマ帝国）の幾つかの凶像を紹介しつつ、クリスマスツリー



リーの由来を解説しています。クルマンに拠れば、この一本の木は、旧約聖書の創世記の二章に登場するエデンの園の中央に生えている善悪の知識の木を象徴し、中世の時代、ドイツの教会では、アドヴェントと呼ばれる待降節、クリスマスへの準備期間に入ると教会の入り口にこの一本の木を飾り、アダムとエバによる「墮罪劇」のページェントを演じたというのです。大勢の村人たちを前に教会玄関の野外で演じられるページェントでは、アダムとエバが

取って食べてはならないという神との約束を破り、神を無視して、その木から実を取って食べてしまいました。それが、聖書が記す「原罪（罪の起源）」人間の罪の始まりの場面です。アドヴェントに一本の木を飾る装飾は、もともとはドイツ地方で豊富に収穫されるリンゴの実が付けられていました。今でも伝統的なクリスマス木の飾りとして、小さな赤い実がクリスマススマーケットで売られますが、ある年に天候不順によるリンゴの不作に見舞われ、ガラス細工で代用し、それから天候に左右されない加工物が装飾品となりましたが、赤い実を彷彿とさせるデコレーションで飾られました。アダムとエバを初め、人間の罪を誘う実をつけた一本の木。こうして、ツリーはクリスマス・ページェントの第一幕、人間の罪の始まりを演じる舞台装置として木が飾られました。そして、イエス・キリストは、人間の罪を贖うために、神でありながら、乙女であるマリアから産まれ、人間と成られた。それが、キリスト教で祝い続けてきたクリスマスです。イエス・キリストはなぜお生まれになったのか？それは、キリスト教を象徴する一本の木である十字架の木の上で、人間の罪を贖うため、罪の贖いに伴う深い苦しみを担うために、御子イエスは救い主（キリスト）として、この世に生まれたという、神による人間の救済のドラマ全体を象徴するのが、この一本の木なのです。一本の木は善悪の知識の木でありながら、やがて姿を変えて、罪を贖うためにイエス・キリストが自ら背負い、付けられる十字架の木を象徴しています。ですからこのイルミネーションで光る一本の木は、対照的に、人間の闇というべき罪と深く結びついたクリスマスを象徴する飾りなのです。

今年の東北学院職員クリスマスもこのツリーをわたしたちの視界に置きながら、各設置学校の皆さん共々、礼拝を捧げます。マタイによる福音書二章九節から、東方からの三人の博士たちが星に導かれて、ユダヤ人の王、メシアとして生まれた御子を拝むためにはるばるエルサレムにやって来た場面です。ツ

リーの上に星を飾るのは、三人の博士たちを生まれたばかりの救い主の元へと導いた星の象徴です。この星によって、三人の博士たちはベツレヘムの家畜小屋まで導かれ、そこで三人の博士たちは黄金・乳香・没薬の献物を捧げて、幼子を拝みました。三つ目の献物ですが、新約聖書で没薬は、イエスの誕生の場面と、イエスの死と埋葬の場面に出てきます。イエスが十字架で死んだ後、当時の習慣に従って、弟子たちはイエスの死体に没薬を塗り込んだ亜麻布を巻き、墓へ葬りました。従って、三人の占星術の博士たちがクリスマスの場面で捧げた没薬は、イエスの死をも象徴する十字架の木、十字架による救済へと繋がる重要な伏線となっていることが浮かび上がってきます。

さて、この三人の博士たちがクリスマスを終えて、それぞれ自分の故郷に帰った後、当時のユダヤの王、時の最高権力者であったヘロデが一三節で「この子を探し出して殺そうとしている」と書かれており、そして一六節には「ベツレヘムとその周辺一帯にいる二歳以下の男の子を一人残らず殺した」という、クリスマスには似つかわしくない、残忍な場面が描写されます。今日の聖書は、愛するわが子が殺されて激しく泣き叫ぶ母の声で閉じられます。私たちが迎えるクリスマスは、老若男女が口をそろえて「メリー・クリスマス！」と言葉を交わす「嬉しい、楽しい、大好き」なクリスマスです。ところが、マタイによる福音書が描くクリスマスは、その直後に、人間の悲鳴と嘆きに満ちた殺戮の罪が描かれ、非常に対照的な描写が重なり合っています。

私たちが生きるこの地上は、紛れもなく、喜びあるところにもまた悲しみあり、歓声のあるところにもまた嘆きの叫びがあり、安心のある所にまた不安があり、そして光のある所にまた闇がある。このツリーは罪と共に罪からの救済という対照的なものを同時に象徴しています。こうして職員クリスマスは今年で三年

連続、夕日が落ちた夜の開催となりました。今、夜の闇の中で、東北学院の職員であるわたしたちは、改めてクリスマスの本当の意味をかみしめながら、イエスがキリスト（救い主）としてこの世にお生まれになったことを共に覚えたいと思います。暗闇に包まれた夜に三人の博士たちを導いたのは光輝く星でした。

東北学院は「LIFE LIGHT LOVE」のスクールモットーのもとに、園児から大学生まで、青少年たちを、罪の闇から救済の光へ、博士たちを夜の闇の中を御子の下へと導いた星のように「LIGHT」を照らし続けていきます。ここに集うわたしたちは、その東北学院の一員であるということを、今年の職員クリスマスは改めて再確認したいと思います。二〇二五年のクリスマスの喜びと祝福が、今宵お集まりになられた東北学院の職員の皆様一人一人と共にありますように。そして、創立一四〇周年となる二〇二六年も神の導きの下、東北学院の教育事業とその運営に共に力と祈りを合わせて邁進してまいりましょう。クリスマスおめでとうございます。

（十二月二十四日 職員クリスマス）

あとがき

東北学院宗教センターは、キリスト教の信仰に基づく建学の精神と「LIFE LIGHT LOVE」のスクールモットーを東北学院の各設置校に「受肉」させるべく活動を続けています。説教集のタイトルについて振り返ると、二〇二二年度から説教集を、「いのち」(二〇二二年度) ↓「ひかり」(二〇二三年度) ↓「あい」(二〇二四年度)と三年サイクルで続けてきました。本年度からは次のサイクル「LIFE」(二〇二五年度) ↓「LIGHT」(二〇二六年度) ↓「LOVE」(二〇二七年度)を予定しています。

東北学院は今年、創立から一三九周年を迎えました。自ずと二〇二六年度は創立一四〇周年の節目となります。歴史は時を刻み、時代も変わりゆき、説教集のタイトルも年々変えています。東北学院のキリスト教教育は不変であり、各設置校において普遍です。昔も今も、そしてこれからも、変わることはない永遠の神の御心を尋ね求めながら、そして神の御心に適う礼拝と教育を志して、東北学院は来る一五〇周年へと向かって前進していきます。ただただ聖霊なる神の導きが、東北学院にありますように、祈念するばかりです。

本年度も、寄稿くださった各設置校の先生方をはじめ、大学礼拝や各設置校の朝の礼拝には他にも多くの近隣の教会の牧師の方々の協力があり、年度の終わりを迎えることができましたことを感謝いたします。

この世界に主の御心に適う平和が来ますように。しかし、来るのを待つだけでなく「平和を造る人々は、幸いである」(マタイ五：九)との主イエスの教えのように、平和を造るのは他でもないわたしたちであることを覚えつつ、また本学で学ぶ若者たち一人ひとりがそのような幸福な人生(LIFE)を生きていくことができますように、祈念するばかりです。

(大学宗教部長・宗教センター主任 原田浩司)



たとえ人が全世界を手に入れても、
自分の命を損なうなら、何の得があろうか。
人はどんな代価を払って、
その命を買い戻すことができようか。

(マタイによる福音書 16章26節)

執筆者一覽

榴ヶ岡高等学校 宗教主任

大学総合人文学科長

大学宗教主任

日本基督教団 仙台東一番丁教会牧師

大学宗教主任

経営学部教授

宗教センターチャプレン（仙台南伝道所牧師）

大学宗教主任

地域総合学部准教授

院長・学長・宗教センター長

大学宗教主任

東北学院中学校・高等学校 聖書科教諭

宗教センター主事（仙台富沢キリスト教会牧師）

東北学院中学校・高等学校 宗教主任

大学宗教主任

日本基督教団 仙台東六番丁教会牧師

西間木 順

吉田 新

川島 堅二

瀬谷 寛

渡邊 蘭子

松村 尚彦

佐藤 由子

藤野 雄大

大澤 史伸

大西 晴樹

大門 耕平

成 智圭

阿部 頌栄

松井 浩樹

岡田 勇督

中本 純

大学宗教主任

幼稚園 園長

大学宗教主任

大学宗教主任

日本基督教団 本郷中央教会牧師

教養教育センター教授・大学オルガニスト

高等教育開発室副室長・講師

大学宗教部長・宗教センター主任

渡邊 有美

島内 久美子

椎名 雄一郎

田島 卓

米山 結実

今井 奈緒子

齋藤 渉

原田 浩司

二〇二五年度 礼拝について

東北学院の各設置校では、それぞれの教育環境に応じた礼拝が日々大切に守られています。各校における礼拝の特色をご紹介します。

幼稚園

幼稚園では、毎月定められた聖書の言葉・主題・目標を大切にしながら、園児に向けたメッセージが語られています。毎週金曜日には、全クラスの園児がホールに集まり、合同で礼拝をささげています。

中学校・高等学校

中学校・高等学校では、福音書を順に読み進めながら、その内容を深く味わう礼拝を行っています。今年度は「マタイによる福音書」を読み終え、「ルカによる福音書」を通して礼拝をささげています。毎朝八時三十分から八時四十五分までの十五分間、中学一年生から高校三年生までの全生徒が礼拝堂に集い、共に礼拝を守ります。

榴ヶ岡高等学校

今年度は年間聖書の主題として『神への信頼』を掲げ、「主はわたしの光、わたしの救い」（詩編二七編一節）の聖句を大切にしています。毎月の聖句と主題を分かち合いながら、『ルカによる福音書』を順に読み進め、その内容を深く味わう礼拝を行っています。毎朝八時三十分から八時四十五分までの十五分間、全生徒が礼拝堂に集まり、礼拝をささげています。

大学

大学では、毎朝一校時と二校時の間にあたる十時十五分から十時四十五分までの三十分間、二つのキャンパスにおいて礼拝が行われています。

東北学院礼拝説教集

第六号

二〇二六年二月発行

発行責任者

院長・学長・宗教センター長

大西 晴樹

編集責任者

大学宗教部長・宗教センター主任

原田 浩司

印刷・製本

株式会社 阿部紙工

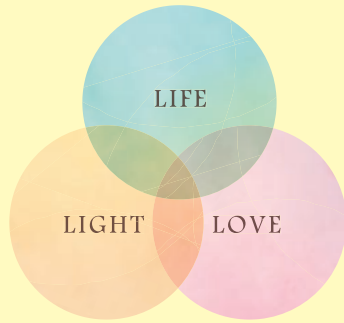
問い合わせ先

東北学院宗教センター

〒984-8588

宮城県仙台市若林区清水小路三一

☎〇二二・三五四・八三二〇



2026年2月
東北学院宗教センター発行